

『人生のおまけ』

～Collateral Beauty～』

作・演出 森下知香

△タイトルの由来▽

『Collateral Beauty』（コラテラルビューティ）は、あるアメリカ映画のタイトル。

邦題は『素晴らしきかな人生』

Collateral＝二次的な、追加の、補足。 Beauty＝美しいもの、素晴らしいもの。

Collateral Beauty＝予想外の幸せ。

転じて、『人生のおまけ』とした。

■キヤスト

- 結城 耕平 (66) 元校長
- 須田 奈津江 (61) 耕平の元妻、介護士
- 結城 晴美 (40) 耕平の長女、シングルマザー、フードスタイリスト
- 結城 美香 (37) 耕平の次女、歯科医院受付バイト、ダンサー志望
- 保田 誠子 (67) 耕平の姉、民生委員、神戸在住
- 結城 琴音 (11) 晴美の娘、小学5年生
- 石井 茂 (65) 喫茶店 Drôle(ドロール)のマスター、耕平の友人
- 石井 健斗 (39) 茂の一人息子、喫茶店二代目、お笑い志望
- 小島 ゆかり (28) インカ発掘プロジェクト団体「チャカーナ」のプログラムコーディネーター
- 庄司 信彦 (35) 「チャカーナ」のプロジェクトリーダー、実質的な代表
- 菊池 薫 (31) 「チャカーナ」の事務局担当
- 井上 琢磨 (42) 晴美の仕事仲間、雑誌のカメラマン

TVリポーター 声のみ

* 「Drôle(ドロール)」とは、フランス語で『変わり者』の意。

* 「チャカーナ」とは、インカの公用語ケチュア語で『南十字星』を表し、未来に希望を灯す光という意。

杉並区荻窪近く。都心から、電車で20分ほど。緑豊かで閑静な住宅街。昔から文人が多く住んでいた街らしく、どことなく文化の香り漂う落ち着いた風景。ここに木造の二階家が立っている。おそらく築20年以上は経過していると思われる。さほど大きくはないが、昔ながらのしつかりとした造りで、どっしりとした印象を受ける。舞台上に家族の居間。使い込まれたソファークッションが置かれている。上手側はキッチンに通じる扉。狭いながらも、きちんと手入れされた庭もある。

プロローグ 2019年8/15(木) 13時頃

オープニングの曲とともに客電が落ちていく。舞台上、結城晴美(40)の姿が浮かび上がる。電話をかけている様子。その後、舞台通路あたりに登場した晴美の妹、結城美香(37)が浮かび上がり、電話に出る。夏の昼。蝉の声。

はい。

美香、あんたどこにいるの？…

晴美 お姉ちゃん？ 何よいきなり？ この週末は、プチ旅に行くって、この前ちゃんと言ったじゃない。

晴美 また？もう…、で、いつ帰ってくるの？

美香 えーと、二泊三日、だから明日帰る。

晴美 どこに行ってるのよ。

美香 仙台。

晴美 なんて仙台なのよ？ (晴美の明かり、ゆっくり消えていく)

美香 別に訳なんかないけど。ぶらあつと温泉入って牛タン食べて、のんびりして…青葉通りに知り合いのインストラクターさんご用達のマクロビカフェもあるし…。だから…明日の夜には帰るわよ。…え？お父さんがどうしたの？…またもうオーバーなんだから…。いますぐって…無理に決まってるでしょ。え？インカ？なによそれ？…は？…わかった、わかった。はい、はい、とりあえず明日。なるべく急いで帰るから！じゃ…(いきなり電話を切られる) あ…やだ？いきなり切った？ も…

曲が入り、美香の姿が消えていく。暗転。

第一場 結城家 8/16(金) 20時30分

結城家の居間に明かりがともる。夏の終わり(お盆過ぎた頃)。20時頃。ゲームNintendo Wii(スーパーマリオパーティ)の音が聞こえる。晴美の娘、結城琴音と(11)と、晴美の幼なじみで近所の喫茶店の二代目、石井健斗(39)がゲームに興じている。

健斗 次、俺の番。よっしゃー…はい、お、三だ…

琴音 …あー、…ラッキーだ。

健斗 なに？…え？これどうすんだっけ？

琴音 これ、A押して。

健斗 あ、こうかー！よし、

琴音 もっと、ガンガン押して

健斗 よし！よし！（押しながら）すげ〜。一気に星十二になった。
琴音 だからラッキーなんだって。
健斗 そうか、お〜マリオ、一位か！…え、なに？ クツパを閉じ込めてるカギがあと一個にな
ったって？ どうずんだよ。
琴音 だから…

晴美が中央キッチン出入口から入ってくる。夕食の後片付けをしている。

晴美 琴音、いいかげんにしなさい。ゲームばかり。そんなことしていると夏休みなんかすぐ終
わっちゃうわよ。

琴音 大丈夫。ちゃんと時間決めてやってるもん。

晴美 宿題は？

琴音 もう全部終わりました〜

健斗 まじかよ、琴音、やるな。

琴音 あー、ドリルとかはね。全部終わった。あとは、読書感想文だけ。

晴美 ほら、やっぱり残ってるじゃない。

健斗 そんなだけなら楽勝だよな。ま、俺なんか、夏休みの宿題なんて、毎年、ほぼ一日で終わら
せてたから。最後の一日で。

晴美 そんなの見習っちゃダメ。

琴音 わかってるに、きまってるじゃん。

晴美は、父の様子を見に行く。下手奥出入口退場

健斗 大丈夫だって、ちゃんと終わればいいの。終わりよければ…お、ミニゲームだ「巨大ク
リボーのはしごバトル」？…ってなんだ？

琴音 だいじよぶ、簡単だから。

健斗 なるほど、のぼって踏む、だな、よしいくぞ！（ゲームに）はい、はい、はい…

琴音 あ〜怒った（笑）

健斗、琴音、気持ちよくゲームを続けてる。晴美が下手奥より登場

晴美 もう…今日はそれどこじゃないんだけど。ねえ、お父さん、いないわよ！どこ行っちゃっ
たの？

健斗 あれ？さっきまでいたよな。耕平さん。

晴美 美香も帰ってこないし。もう！

琴音 …ねえ、そろそろやめよつか？

健斗 え、いとこなのに？

琴音 …だってさあ（晴美の方をみて）

その時、玄関のドアを開ける音。

琴音 あ、誰か帰ってきた。

健斗 耕平さんか？

晴美 美香じゃない？

美香 （居間に入ってきて）ただいま。

晴美 美香、遅かったじゃない！

美香 ごめん！いろいろあってさ。あら、健斗、来てたんだ。
おっ。

美香 (そこにあるゲーム機を見て) また、マリオやったの？相変わらず好きだね。君たち。
(「君たち仲いいね」というニュアンス。琴音と健斗に)

精神年齢おなじなんだから。

健斗 まあな。永遠の少年ってか。(陽気に) (この辺り、どこかでWiiを消すしぐさ)

美香 健斗くん、ほめられてないよ。三十九歳(笑)

健斗 うるさいよ、三十七歳。(軽くやりかえす程度)

琴音 美香おばちゃ：

美香 …ん？(おばちゃんという言葉に反応して、怒り目)

琴音 (それをうけて言い直す) 美香：ちゃん、仙台どうだった？

美香 うん、のんびりするつもりでいったんだけど、結構疲れた。観たいところいっぱい、欲張

つちやって…。可愛いかふえもいっぱいあったし。

健斗 せっかく旅行行ったんだから、ゆっくりすりゃいいのに、相変わらずの貧乏性だな。

美香 うるさいわ。(晴美に) はい、お土産。(お菓子の箱を出す)

健斗 おっ、サンキュ。

美香 君にあげてないよ。

健斗 けちだね。

晴美 (お土産を受け取って) あんたさ、旅行もいいけど、そんなにしょっちゅう仕事休んで大

丈夫なの？

美香 ヘーキヘーキ。バイトだもん。

健斗 今度は、何やってんだっけ？

美香 歯医者を受付バイト。結構時給いいんだ。

晴美 ねえ、(美香に) 貯金とかしてないでしょ？

美香 お姉ちゃんに言われたくない。

晴美 うちはしょうがないでしょ。シングルマザーで、小学生の娘がいるんだから。お金ためて

る場合じゃないの。

美香 フードスタイリストって、もうからないの？

晴美 フリーだから。いろいろ大変なのよ。

健斗 大変ってほど、仕事してないけどな。

晴美 うるさい！喫茶店のパラサイト息子のくせに。健斗こそ、お笑いは趣味でやってんでし

よ？

健斗 なにおう、ブレイク寸前のユーチューバーに向かって…、おまえ、見る目ない。

美香 まあ、二人とも似たようなもんじゃない。

晴美 美香！あんたも、いつまで、だらだらダンサー目指してんの！あー、もう！(ぶいっと

キッチンへ)

美香 (健斗と琴音に) どうしちゃったの？あの人(お姉ちゃん)めっちゃ機嫌悪いんだけど。

健斗 ゲリラ豪雨並みだね。

琴音 うん。

晴美 (飲み物などを持って戻ってくる)

美香 (晴美に) ねえ、ところで、電話で言ってたお父さんの話って何？

晴美 それよ！これから、みんなで話するはずだったのに、お父さん、いつのまにか消えちゃ

ったのよ！肝心な時にいつも逃げるんだから。

お祖父ちゃん、ドローネ「Drôle」(健斗の父の経営する喫茶店の名前。フランス語で「変わり者」の

健斗 意) 行ったんじゃない?
おれんちか! それだな。
晴美 今日はお父さんと、例の話をきちんとしていって、あんなに言つといたのに…。
健斗 耕平さんらしいな。
美香 要するに何があったのよ。私全く話が見えないんだけど…
琴音 だから、お祖父ちゃん、健斗んちに逃げたんじゃないかって。
美香 へ?
晴美 はあく(ためいき) …それがね…

曲が入り、居間中央あたりの明かりを残して舞台暗くなる。上手奥、喫茶ドロールが、回転し現れる。場転が終わったら、明かりが喫茶店に移り、居間中央明かり消える。

第二場 喫茶ドロール 8/16(金) 20時30分

荻窪南口。駅からやや離れた街道沿いにある喫茶店。ドロール。柔らかな曲が薄く流れている。趣味のフィギュアや絵画、写真などがごてごて飾られ、個性的な雰囲気。オーナーで健斗の父、石井茂(65)がカウンター内でたこ焼きをつまんでいる。そこに、カラランと音がして、晴美、美香の父で、琴音の祖父、結城耕平(66)がふらりと入ってくる。(舞台上手手前ドアより登場) なんとなく心ここにあらずだが、なにか話を聞いてもらいたそうな風情。茂は、ゲイではないが女言葉が口癖。

茂 あら、いらつしやい。こんな時間に珍しい。

耕平 …いやちよつとな。(カウンター席に座る)

茂 コーヒーでいい?

耕平 いや…最近胃の調子が…。

茂 あら、じゃオレンジジュースにする? 今日、いいオレンジがあるのよ。(舞台上手奥、厨房に一度退場)

耕平 (奥に向かつて) なんだ、たこ焼きか?

茂 うん、お夕食の代わりにね。仲通りのきらく屋の。最近これハマってるのよ。耕ちゃんも食べる?

耕平 いやもう晩飯食べたから。

茂 (厨房からオレンジジュースを持って登場) はい、お待たせ。さあどうぞ、ね、美味しいでしょ。…あ、そうだ、うちの息子、お宅に行かなかった? この前註文もらった、ガテマラ、やつと入ったから、さつき届けに行かせただけど…。

耕平 ああ…そーいや来てたな。さつき、うちで晩飯、一緒に食べてた。

茂 やだまた? いつも悪いわね。

耕平 いや…

茂 まあどうせ暇だから、うちはいいんだけど。つたく行つたつきり戻つてこないんだから。いい年して相変わらずふらふらしてて、ほんと何考えてんのかしらね。

耕平 さあな…:うちの連中だつて似たようなもんだ。遊びだか仕事だかわからんことやっちゃ、歳ばっかりくつてる。

茂 いい時代よね。

耕平 おれたちの頃とは違うんだ。

茂 耕ちゃん、定年退職してから、もう一年以上たつたわよね。そろそろ退屈でしょうがないんじゃない。

耕平 冗談じゃない。毎日、悠々自適で天国みたいなもんだよ。

茂 なによ、強がっちゃって。

耕平 毎日が日曜日だ…

茂 …そうね…

耕平 茂…お前のコーヒーの飲めるのも、あとわずかだな。

茂 あら？そんなに胃が悪いの？

耕平 いや…そうじゃなくて…ちよつとな…出ようと思ってるんだよ、そろそろ…

茂 出るって？なにが？

耕平 家を出るつもりなんだよ、おれ。

茂 は？

照明が切り替わって、結城家の居間

美香 家出？お父さんが？

晴美 …家出って…そういうことじゃなくてね…

琴音 インカ帝国だって。

健斗 インカ？

晴美 だから…うちを出て、外国に行くって言い出したのよ。突然。

美香 なんの話？それ？

晴美 …私だって、わけがわからないの。

健斗 つまり海外旅行行くってことだろ。耕平さん。

晴美 だったらいんだけど…そうじゃなくて、移住したいんだって。

美香 えっ？どこに？

晴美 …はあ…あ…

健斗 …？あ！それがインカか！

美香 ええ〜！…って…だからそれどこ？

健斗 おまえ知らないのかよ。インカっていえば南米の…だよな？ペルーのあたりか？

晴美 そう。…なんかね…遺跡を掘るんだって。

美香 遺跡？

健斗 へえ〜また、そりゃいきなり…しぶいなあ…

晴美 そんなのんきなこと言ってる場合じゃないのよ。

健斗 耕平さん、そういうの興味あったんだ。

晴美 ないわよ、全然！そんな話、聞いたことない。ね？（美香に）

美香 さあ…、よくわからないけど…たぶんないんじゃない？ね？（琴音に）

琴音 さあ〜？？

晴美 それで…昨日いきなり、お父さん、「これから、自分はペルーに移住する。インカ帝国の遺跡を発掘するんだ」って…。はつきり宣言したのよ。

健斗 それ…おもしろすぎるな…

美香 …まさかほけたわけじゃないよね？

晴美 …あのね二人とも…

再び照明が変わって、喫茶ドロール

茂 やだ。耕ちゃん、頭大丈夫？

耕平 そんなにおかしいか？

茂 だって、唐突すぎるじゃない。インカ帝国って。

耕平 うん… まあそうだな。
茂 なんかあったでしょ？

耕平 ん？

茂 そりゃ、耕ちゃんは、長年、校長先生やってきたわけだから、アカデミックなことに興味はあるわけじゃない？だけど、発掘ってちよつと違うわよね？まあ、肉体労働だし、きついしく、いい年していまさらやることじゃないわよ、ね？

耕平 …うん。

茂 そもそも現国の先生だったわけだから、(耕ちゃん)考古学って、まるきり専門外じゃない。…いちがいにそうともいえないぞ。

耕平 しかも、南米でしょ。耕ちゃん、外国嫌いだったわよね？「日本中に、これだけ風光明媚な場所があるのに、なにも好き好んで海外旅行行く人の気が知れない」って、よく言ってたわよね？

耕平 茂…人は変わることもあるんだよ。

茂 なんて、変わったの？

耕平 ……。

茂 白状しなさいよ。ねえ。

耕平 …うん。

(再び結城家(ドロールと結城家と両方明かりついている))

美香・健斗 女?!

晴美 ちよつと！声大きい。

美香 だけど、女の人に誘われたって、どーゆーこと？

晴美 それが…あのね、ほら、公園の先の、中央図書館で知り合ったんだって。

ドロールにて

耕平 いや、最初は、俺が探してる本を偶然彼女が先に借りていてな、「じゃあ、私が読み終わったらすぐに返しますから」って…。たまたま。

茂 たまたまね。

耕平 そうしたら、次に借りようと思っていた本も、また彼女が持ってたな。

茂 フーン、趣味があったってわけね。

耕平 いや、本の趣味がな。…で、なんとなく話すようになって。

結城家にて

健斗 で、その人が、インカの発掘の話をしたってわけか。

晴美 学生の中から発掘調査をやってて、今じゃ、発掘プロジェクトに係るその法人を立ち上げてがんばってるんだって。

美香 だからって、なんでお父さんも一緒にやることになったのよ？

晴美 その娘に相談されたらしいの。人員も足りないし、募金もなかなか集まらないって。

健斗 え？そのコ？

美香 まさか、若いおねえちゃんなの、その人？

晴美

そうなの。

ドロールにて

耕平

そのプロジェクトっていうのはな、国際的なボランティア団体で、三菱東京銀行や、石山島播磨も協賛してるそうだ。組織もしっかりしていて、海外では有名な団体なんだよ。

茂

ふーん。(そんなすぐ信用して大丈夫？という気持ち)

耕平

いや…だから、すぐに信用したわけじゃないんだ…団体の説明会にも行ってな。その娘、

茂

東京大学って、東大？

場面は二カ所だが、だんだん会話がリンクして掛け合いのようになっていく

健斗

東大卒！すげっ！

茂

ちよっと待って。今そのコッて聞こえたけど、

晴美

うん。

美香

で、いくつくらいなの？

琴音

二十八だつて。

健斗

二十八？

美香

そんな若いんだ。

耕平

べつにそれはいいだろう。

茂

どんな娘なの。

晴美

…それが、すごい綺麗で魅力的な子らしいの。

耕平

うん、まじめで頭のいい、実にしっかりしたいいい娘さんだな。

美香・茂・健斗

へへへ

健斗

やるな、耕平さん。

茂

やるわね〜耕ちゃん。

晴美

ふざけないでよ！！

耕平と茂もまるでその声が聞こえたかのようにはっと反応する

耕平

え？

包み込むように曲が入り、暗転していく。

第二場

結城家 8/19(月)11時

結城家の居間。軽快な音楽が流れる。音楽をかけながら、晴美がフードスタイリストとしての試作用のケーキを作っている。ダイニングテーブルの上には、ケーキ材料や調理道具など。雑誌のカメラマン、井上琢磨(42)が、その様子を時々撮影している。

琢磨

(奥に向かって)へへすげえ、元気。いいよ、お父さんかっこいいじゃん。

晴美

(中央キッチンから出てきて)ばかよ、ほんとばか。ねえ、男ってどうしてそういう風に簡単に騙されるのかな、若い女の子に。

琢磨

まだ、騙されてるって決まったわけじゃないだろ。

晴美

どう考えたっておかしいでしょ。まだ、知り合ったばかりよ。そんな得体のしれない女

の子に、ちょっと相談されたからって、なんでいきなり地球の反対側に行くわけ？ 常識で考えたって変よ。

まーな。

晴美 だいたいうちのお父さんってね、全然そういうタイプじゃないの。クソがつくくらい真面目で石頭で。石橋たたいて渡るところか、たたきすぎて壊しちゃうくらい慎重な人なのよ。そういう人に限って、ふっと魔が差すってことあるよな。

琢磨 (ばつと音楽を止めて) やっぱり？ そうよね？ ねえ、井上くんもそう思う？

琢磨 うーん、ま、そうだな…。…お父さん、さみしいんじゃないかな。リタイヤして、なんにもやる事が無くなつて、誰にも必要とされなくなつて…。だって、おたくのお母さん、ダンナが定年になったとたん、「別れます」って出て行っちゃったんだろ。娘たちも孫も、自分の生活があつて忙しい。そういう時に…まあ…いい女に頼られると…「じゃあおれが何とかしてあげよう」って、そう思うこともあるよ。

晴美 やだ、そんなの。だって…お父さんいくつだと思つてるのよ。相手は二十八の娘よ。気持ち悪い。

琢磨 別に男と女とかっていうんじゃないよ、おやじみたいな気持ちかもよ。

晴美 もうしらない。

琢磨 それも、娘としては複雑？ あ、晴美ちゃん、妬いてんだ？

晴美 ちがうわよ！ 心配してるだけ。それにお金だって…相当かかるらしいの。

へえ。

晴美 五万や十万じゃないんだから。

琢磨 っていうと？

晴美 …うーん、よくわからないけど、何十万単位かも？

琢磨 やつべえな〜！ 新卒のオレオレ詐欺か？ あ、「オレ」じゃないな (笑)

晴美 ちよつと、他人事だと思つて、面白がつてるよね？

琢磨 ごめんごめん。(料理している手元をみて) あ、そのフルーツ何？ すげーいい色じゃない。

晴美 でしょ？ これ、桃なの。イチゴのシロップで染めてみたのよ。はい。(琢磨の口に桃を一切れ。食べさせてあげる)

琢磨 (食べて、うまいという仕草。セリフで「うまつ」、とか言つてもいいです)…晴美ちゃんのレシビ、最近、編集部で評判いいよ。

晴美 ほんと？

琢磨 うん、見た目きれいだし。でも、(見た目)だけじゃなくて、ちゃんと食つてうまい。さすがあ、料理研究家志望。

晴美 だといんだけど…。でも、このフードスタイリスって仕事も肩書次第なのよね。なんとか先生のお弟子さん、とか、調理系のなんとか学校出てる…とかだと、すぐお呼びがかかるんだけどなあ。

琢磨 晴美ちゃんには、アイデアとセンスがあるじゃない。

晴美 (苦笑) うまいなく井上くん…

琢磨 いや、これカメラマンとしてプロの目から見た、率直な感想だよ。…で、どうするの、これから。

え？

晴美 いや、お父さん。

晴美 あ、それがうんかね、今度その娘が、うちに来るのよ。そのインカプロジェクトについて、個別説明だつて。

へ〜。

琢磨 渡航費用のこととか、スケジュールとか、事前の準備のこととか…。しつかり話聞いて、怪しい団体だったら、コテンパンにのして、撃退してやる。

琢磨 がんばれよ！晴美ちゃん。
晴美 うん。…さて、そろそろ仕上げちゃおうか。あと一時間で琴音が塾から帰ってくるから。
琢磨 あ、今日は琴音ちゃん、彼氏さん（健斗のこと）とこじやないんだ？
晴美 （ごまかして）だれよ彼って？ ちがうわよあいつは。
琢磨 例の幼なじみくん。琴音ちゃんもなついてんでしょ。
晴美 さあね。
琢磨 ね、まだ結婚しないの？
晴美 井上くん。おしゃべりはおしまい。
琢磨 …了解。（再び音楽をかける）

音楽の中、作業を続ける二人。やがて、暗転していく。

第四場 結城家 8/23(金) 14時

結城家の居間。耕平、晴美、美香が、座り、なんとなくピリピリした様子で待っている。ピンポンと、呼び鈴の音。三人、ハツとして、顔を見合わせる。一瞬の躊躇。さらにピンポンと鳴る。

美香 （立ち上がって）私出る。（下手奥へ退場）

晴美 うん。

耕平 …

シーンとして待つ。美香が、お客さんを迎え入れて案内してくる気配。声が聞こえる。

カゲ声

美香 （ドア越しに）はい。

信彦 どうも、チャカーナと申します。

美香 あ、はい（ドアを開けて）どうぞ。

すると、インカプロジェクトのメンバー、小島ゆかり（28）が、颯爽と現れる。

ゆかり おじやまします。耕平さん。

耕平 ああ…

ゆかり 素敵なお宅ですね。わくピアノ？ お嬢さんが弾かれるんですか？

晴美 ちよつと、あの。

ゆかり あ、晴美さん？ 初めまして。（まじまじ見てにっこり）想像してた通り、可愛い方ですね。

晴美 （人懐っこく、なれなれしい様子）

ゆかり え？（お父さんを見て、この人だれ？）

晴美 私、小島ゆかりです。チャカーナの。いつも、耕平さんにはお世話になってます。

ゆかり …（なに、この失礼な人という気持ち）

ゆかり え？（なんで怒ってるの？）

庄司信彦（35）、菊池薫（31）、一步遅れて美香が入ってくる。

信彦 （薫と入ってきて）失礼いたします。（三人の微妙な雰囲気を感じて）本日は、お忙しいと

耕平 ころ、お時間をとっていただきありがとうございます。
いや、こちらこそ、わざわざ来てもらって、申し訳ない。

信彦 私は、国際ボランティア団体、インカプロジェクト「チャカーナ」で、プロジェクトリーダーを務めております庄司信彦と申します。で、こっちは（ゆかりにふる）
プログラムコーディネーター、小島ゆかりです。

薫 どうも…事務局担当の菊池薫と申します。
どうも…うちの娘たちです。こちらが上の娘で晴美。でこっちは…

ゆかり 美香さん、ですよね？（にこやかに）
美香さん（お父さんを見る）

耕平 うん…いや、今日は、いろいろとお世話をお掛けしますが、よろしくお願ひします。
ゆかり いいえ、お嬢さんたちに会えてうれしいです。

晴美 ずいぶんお若いんですね…みなさん。

耕平 庄司君、今日は大貫先生はいらっしゃらないのかな？

信彦 はい、実は先生は、急な学会の用事で、昨日からニューヨークに行くことになりました。
そうか…、今日こそはお会いできると思っていたんだが…

信彦 申し訳ありません。先生も結城さんにお会いするのを、楽しみにしてらっしゃったんです
が…

美香 あの…とりあえず、座ってもらったら？

晴美 ああ、失礼しました。どうぞ（ソファの方へ）

信彦 ありがとうございます。（どこに座ろうか、ちょっと迷う）あの…椅子…
美香 私、持ってくる。（部屋を出ていく）

晴美 （美香に）うん…

薫 お手間おかけしてすみません。

晴美 いえ、こんなに大勢でお見えになるとは思ってたので…
ゆかり お手つだいしましょうか？

晴美 結構です。

耕平 私の分はいい。今日は、お前たちに話をしにきてもらったんだから、お前たちだけでいい
だろう。じゃあ（部屋を出ていこうとする）

晴美 お父さん、何言ってるの、ここにいてよ。
しかし…

晴美 いいから座ってて。

ゆかり じゃ、耕平さん、私とこっちに座りませんか？（クッションを取り上げ、床に座り込み）は
い、どうぞ。

晴美 （なんであんたが決めるのよ）父は、腰が悪いんです。お父さん、いいからここにかけ
て（ソファに座らせて）

ゆかり …ねえ、なんで、あなたが決めるの？ 私、耕平さんに話してるんだけど。…なんだ、ピ
アノの椅子があるじゃん（ピアノの椅子へ）

その椅子は…あの…ちよっと（慌てて止める）

ゆかり（制して）

なに？…ああ、（晴美に）ごめんなさい。

美香が椅子を抱えて入ってくる

美香 おまたせしました。…どうしたの？

晴美 なんでもない。とりあえず…どうぞ座ってください。

美香 お姉ちゃん、椅子ここでもいい？

晴美 うん。あ、あっちのソファ、向こうに持って行ってあげて。

薫 あ、ありがとうございます。

信彦 どうも…失礼します。

大体こんな感じのやり取りをして、ようやく、皆ソファと椅子に腰を掛ける。どうにか場が落ち着く。

信彦 では、改めまして…私、庄司と申します。(名刺を娘たちに渡す) よろしくお願いいたします。

晴美 あの…、このプロジェクトリーダーってというのはなんですか?…団体の代表は、国立民族博物館の大貫教授って方と聞いてたんですけど…

信彦 はい、チャカーナの正式な代表は大貫正夫教授です。私は、インカプロジェクトの実務というか…現場でリーダーを務めております。

美香 今日は…いらつしやらないんですか?

信彦 申し訳ありません。

一同ぎこちない様子 間

信彦 …えくまず、団体名についてですが、この「チャカーナ」というのは、インカの公用語ケチュア語で『南十字星』を表していて、未来に希望を灯す光という意味があるんです。

美香 へ…

晴美 あの…コーヒーでいいですか。紅茶もありますけど(たちあがって)

美香 ああ、あかし入れてこようか?

晴美 いいから、あんた座ってて…

美香 だって、ほら、お姉ちゃん、話聞かないと…

晴美 いいわよ…

ゆかり (ふつと笑う)

晴美 …なんですか?

ゆかり あー、なんだか、耕平さんのおっしゃる通りのご家庭だな、と思って。

晴美 …どういう意味ですか。

ゆかり なんかもめんどくさい。あなたたち。

晴美 …は?

言いたいことがあるなら、普通に言えあえばいいのに。家族なのに、ちゃんと向き合わないで、いつも誰かのせいにしてる。優しいふりして気を使い合ってるくせに、相手の気持ちなんてわかるうともしない。

晴美・美香 ……

ゆかり だから疲れちゃう。…みんな

薫 ちよつとゆかりさん。

ゆかり お互い不満がいっぱいなのに、いつもごまかしてるから、いごこちが悪い。

信彦 いいすぎだぞ。…すみません。

ゆかり …ごめんなさい。今日はそんな話しに来たわけじゃないのに、つい…申し訳ありません。

晴美 …ああ…べつに。(なんなのこの人、いきなりって気持ち)

美香 …はい、あの、びつくりしたけど、(晴美に) なんかね…

ゆかり …私、実はちよつととうらやましいな、って思ったんです。きつとみなさん、お互いのこと大切に思われているからこそ、なんですよね。…私、そんな風に気遣ってくれる家族がいなかったんですよ。ちよつと事情があつて、小さい頃、家族と別れて、まあいわゆる施設

で育ったんです。それはそれなりに、よくしてもらいましたし、けっして不幸だったとかそういうわけじゃないんですけど、こういう家庭の雰囲気ってしらないな、って思ってた。…施設だと、もつと言いたい放題なんですよ。こう…わちゃわちゃして…まあ、にぎやかでいいんですけど…(笑)

晴美・美香 ……

ゆかり 私、耕平さんとお会いして、いろいろなお話をさせていただきました。耕平さんの現在の状況やこれからについて、様々なご希望をうかがい、その上で、今回のプランをおすすめさせていただいてるんです。けっして、無理にお勧めしているわけではありませんので、その点については、どうぞご理解くださいますよう。…どうか、おラクに…ご質問があったら、どんどんおっしゃってくださいね。

…はあ。

晴美

ゆかり

(薫から、書類を受け取って、晴美たちに渡す) それではまず、こちらをご覧ください。今回お勧めしている、インカ発掘プロジェクトに関する資料です。お二人は、インカ帝国って、どういうイメージをお持ちですか？

美香

ゆかり

きつと日本からおーい地球の裏側にあつて、わけのわからない未開の土地で、神秘的といえは聞こえはいいけど、どっちかというとうさん臭くて、本当に存在したと言うよりも、伝説の中だけにあるような謎だらけの国、という感じですか？

晴美

美香

正直、よくわからないっていうか、興味が無い。…ですわね。

ゆかり

私だって、最初はそうだったんですよ。私は、先ほども言ったような家庭の事情もあつて、子どものころから、手っ取り早く稼げる仕事に就きたい、そのためには人の二倍も三倍も勉強して、誰にも負けない学力をつけて、末はキャリア官僚か総合商社かメガバンク…みたいな考え方だったんです。ところが、高校生の時に…、すごく優秀で、その上熱血漢で面白い先生がいて…私の担任だったんですけど。その人が考古学マニアで。それで、夏休みにむりやり群馬県・龍山寺というところに連れていかれて…発掘手伝わされたんです。今思えば、勉強やりすぎで頭おかしくなつてた私に息抜きさせるつもりだったんでしょうね。そしたら、その時、私が掘り起こした瓦が、偶然にも歴史的に貴重な価値のあるものだったんです…(笑) 先生に、ものすごく褒められて…私、舞い上がっちゃったんですよ。気が付いたら、なぜか発掘にのめり込んでました。それで、考古学のできる学部に進路変更して。在学中は、研究のために必死でバイトして、あちこちの遺跡行きました。卒業後も、そうやって夢中で続けているうちに、この活動に出会ったんです。

へえ、そういうことだったんだ。

美香

信彦

考古学というと、特殊な学問というイメージがありますが、実は、とても身近な学問です。たとえば先ほど言っていた瓦一つをとっても、正しい学術鑑定をすることによって、作られた時代、当時の文化、流行、人々の生活する姿が、そこから浮かび上がってくる。見たことのない古代の人々の生きた証が、そこにあるんです。発掘自体は、非常に地味で苦勞の多い作業ですが、自分の手で貴重な遺物を掘り出す喜びは、何物にも代えがたい。体験してみても初めて実感することです。

美香

晴美

(晴美に) なんか、ちよっとおもしろそうね。
(美香に) ベつにおもしろくない。それに…だったら、わざわざ外国まで行かなくても、日本ですべてできるんじゃないですか。よりによって、ペルーなんて。危険だし。

美香

ゆかり

まあ…たしかにそうだけど…
もちろん、国内という選択肢もあります。でも…
俺が希望したんだよ。

晴美

お父さん。

耕平 この小島さんが在籍していた東大総合文化研究科の関^{せき}ゼミというのは、インカが専門なんだそうだ。せっかく始めるんだつたら、専門家がいるところがいいだろう。

晴美 それだけの理由で、わざわざペルーまで行くの？ そんないきなり外国に行つて、やつてみたら、やつぱり無理でした、つてわけにはいかないでしょ。(ゆかりたちに)ごめんなさい、失礼だけど、あなたたち、ちょっと無責任なんじゃない。うちの父は、もう六十六よ。いきなり見知らぬ国に連れてつて、肉体労働させるなんて…無理です。

耕平 晴美、おまえなあ…(そこまで言わなくなった)

晴美 だって、この人が、はっきり言えつていうから…。ですよね？えーと、小島さん。

美香 あたしは、やつてみてもいいような気もするけどな。

晴美 美香。

ゆかり あの、やつてみたらいいんじゃないですか？もちろんいきなりペルーに行くわけじゃなくて、国内での発掘も！自分自身で掘つて触つてみたら？そうだ、あなたたちも一緒に！ちよつと、なんで、私まで一緒にやらなきゃならないのよ。勝手なことばかり言つて。

耕平 おい、よさないか…

ゆかり だから…わかんないかな！もう…

信彦 ちよつちよつとゆかり、おちつけ。すみません。こいつすぐ熱くなるんです。いかげんにしろ。結城さん、申し訳ありません。

耕平 うちの娘のほうこそ、失礼なことを申し上げまして…すみません。

薫 あの、ちよつと補足させていただきますね。当団体では、初めてプロジェクトに参加する方のために、国内での発掘体験を含めた教育プログラムを用意しております。それを体験してみたら、どうするか、決められたらいいでしょうか。その詳細はこちらに…(資料を示す)

美香 ふくん、なるほど…そういうことか。

耕平 そういうことだ。

薫 よろしければ、一度ゆつくり資料に目を通していただいて、ご家族でよく話し合われてみたらいいでしょうか。

耕平 そうですね。お見苦しいところを見せてしまつて、誠に申し訳ありません。今日のところは、ここまでにして、また、あらためて、私の方からご連絡いたします。

信彦 そうですね。申し訳ありません。では、後日改めてということ。(ゆかりに)ちゃんと挨拶しろよ。

ゆかり …耕平さん、…ごめんなさい。

耕平 いや…

信彦 では、失礼します。

ゆかり、信彦、玄関の方へ。最後に、薫が帰ろうとして立ち止まり

薫 …あの、この本は、日本人研究者による海外での発掘調査についての入門書です。とてもわかりやすく書いてありますので、よろしければ、ご参考までにどうぞ。

晴美 ありがとうございます。私も取り乱しちゃつて、どうも失礼しました。

薫帰つていく。それぞれ挨拶をかわす。耕平玄関まで見送る。舞台上、晴美と美香が残る。

美香 ね、あの女の子、菊池薫さんだっけ？(名刺見て)すっかりしてるわね。

晴美 それに比べて、あの小島ゆかり。ほんとに東大卒？綺麗だけど…ガラ悪くない？

美香 ガラと頭は関係ないでしょ？あたし嫌いじゃないなあ、小島さん。

晴美 はあ？

美香 でも、なんか意外！ 天然キヤラじゃない。お父さん、あーいうの好み？

晴美 しらない。…お父さんもお父さんよ。でれでれして…。私たちの悪口、あの娘にペラペラしゃべってたってことですよ。

美香 まーね。…でも、あのリーダーの庄司さんって人、頭良さそう。いい感じじゃない？

晴美 はあく、あんたってのんきなね。…あれ、お父さんは？

美香 ……なんか静かね。まさか…

玄関から声が聞こえ、健斗と琴音が入ってくる。デイズニールランドから帰ってきた様子。

琴音 ただいまー！ お母さん、どうだった？ インカ？

健斗 おう、もう終わったか？ あれ、耕平さんは？

晴美 また逃げた！

ブリッジの曲が入り安定していく。

第五場 結城家 9/15 18時

明かりがつくと、結城家の居間。壁にはインカの地図とプロジェクトのスケジュール表などが貼ってある。国内での発掘研修を出かけた耕平が帰宅したところ。四つん這いでありながら入ってくる。耕平は、麦わら帽子にアウトドアスタイル。やや日に焼けている。

耕平 う〜ん…

琴音 お祖父ちゃん、どうしたの？

耕平 ああ、琴音か…いやなんでもない。ちょっと腰がな。(くるしそう)

琴音 大丈夫？ 美香ちゃん！

耕平 なんだ、あいついるのか？ (琴音に) いい、呼ばんでいい。う〜む…(たちあがろうとして、またうずくまる)

美香 (二階から降りてきて、居間に入りながら琴音に) なに？ どうしたのよ？ (父に気づき)

耕平 お父さん！…あらま…(くすくす笑い)

耕平 なにがおかしいんだ。

美香 だって…。今日、また発掘体験行ってきたんでしょ？ も〜、張り切りすぎ。(笑)

耕平 そんなことはない。美香、なんか飲むもの持ってきてくれ。

琴音 あたし持ってきてあげる。(キッチンに取りに行く)

耕平 ああ、悪いな。う〜む(自力で起き上がって、ソファの方に行こうとする)

美香 お父さん鞆下ろして。(鞆を下ろしてあげる) なに？ 腰？ またぎっくりやった？ 立てる？ (助け起こして、ソファにつれていく)

耕平 たいしたことはない。途中まではよかったんだ。ずっとしゃがんで掘ってて、終わり間際、急に立ち上がったとき、ずきつとな。

美香 いいかげん懲りたんじゃない？

耕平 なにをいうか。今日はずいぶん進んだぞ。B地区はあらかた調査できたんだからな。お父さんの考えでは、次回あたり、もう一つ下層の遺構面にかかれるようになるだろう。

(救急箱を出して) はい、後ろ向いて(スプレーする)で、アンモナイトでもみつかった？ なにをいっとるんだ、おまえは。そういうことじゃないんだ。今、調査しているのは、中世の水田跡だ。こう、水田の土を少しづつ削り落としていくと、水田の耕作土の中に砂が楕円形に入る部分があるんだよ。これが、なんと、水田の上を歩く人の足跡だったんだ。

美香

ふーん。

琴音 はい、麦茶。

耕平

おお…すまん。 (飲んで) ああ、旨い。…水を張ったやわらかい水田の土の上を歩くと、体重で足が沈むだろう？ その沈んだ足を引き上げたときに、まわりの水と一緒に細かい土が入り込むことで、今回のように足跡が残るんだ。

美香

あ…そう。…で？

耕平

これは、数百年前、ここで働いていた人の足跡なんだ。それが、当時のままの状態で見されたってことなんだぞ。どうだ？

美香

どうって…えっ？… (琴音に) それがどうしたの？

琴音

さあ？

耕平

おまえたちは…まったく、なんにもわからないんだなあ。いいか、これは学術的に言うんだな…

美香

あ！いつけない！そろそろ、ダンス行く支度しなきゃ…あ、このかばん、持ってちやうね

琴音

(二階に行こうとする)

琴音

あたしも！宿題があったんだ… (同じく居間を出ていこうとする。少し歩いて振り返り)

耕平

お祖父ちゃん。

琴音

うん。

耕平

がんばって。

耕平

…：おう。(体を起こそうとして、また顔をしかめる) いたたた…

曲が入り、暗転。

第六場 喫茶ドロール 10/2 15時

喫茶ドロール。カウンター内に、健斗。カウンター前の椅子に晴美と茂。

晴美

そうなの。もう、すっかりその気になっちゃって。

茂

ふーん…何回くらい行ったの？発掘？

晴美

えーと、東松山に二回、山梨に三回。で、計五回。この前、腰痛めて帰ってきたんだけど、それでもめげずに通ってる。動けないもんだから、今度は、現場で仕切り始めちゃってるらしいの。

健斗

耕平さん、校長先生だもんな。

茂

仕事辞めたって、なかなか先生気分は抜けないってことじゃない？ ここまできたら、絶対にあきらめないわよ。耕ちゃん。

健斗

だけどさ、そんなにやりたいんだったら。いいじゃん、やらしてあげれば？

晴美

うーん。

健斗

無理しない程度だったら、な。…晴美心配しすぎ。

茂

そうね。おじじだって、なんかやることがないと。精神衛生上も、その方がいいんじゃない？

晴美

まあね…。日帰りでやってるくらいなら、私だってそう思うけど…。そのために外国にまで行くっていうのはね…。

健斗

ペルーって、日本からのくくらいなの？

茂

うーん、アメリカ経由で二十四時間くらいってことかな。

晴美

…遠いわね。

渡航の手続きとかビザの問題は、あの人たちがやってくれるみたいなんだけど、(目の前に

プロジェクトの資料を広げる) 問題はこれよ。ひと月行くだけで、いくらかかると思う?
茂 …え?どのくらい?
晴美 五十万。
健斗 なんだよそれ! じゃ、移住するって話になれば…
晴美 別途見積っていつてたけど、たぶん、そうなれば、お父さんの年金、全部根こそぎ持って
かれちやうってこと。あの人たちに。
健斗 それは、えぐいな…。
晴美 それに、向こうで、けがや病気したらどうするつもりなのよ。こんな離れてるんじや、だ
れも助けてあげられないわよ。
茂 ねえ、本当にあの団体、大丈夫?
健斗 この前言ってた国立なんとか博物館の大貫先生ってのは、まちがいなく代表だったんだろ
うん。この前現場でその人と話したって、お父さん。
晴美 それに、この前言ってた、なんとか薫さん? って人は、いろいろ面倒見てくれるんだろ。
健斗 うん。だから一概に、インチキとは言えないけど…。
晴美 でも、聞いたことないわよね? チャカーナなんて…。そもそも名前だけで怪しい感じ。
健斗 名前で判断するなって。
晴美 だけど…なんだか全体的に不自然なのよね。…なのに、どうして、お父さん簡単に信じち
やうのかな。それがわからない。
健斗 …うん、たしかに。
晴美 なんて、ペルーじゃなきゃダメなの? なんで? おかしいと思わない?
茂 そうね…、いつもの耕ちゃんらしくないわね。
健斗 他に、なにか訳があるんじゃないか? 俺、なんかそんな気がするけどな。
晴美 …うん。
健斗 …まあ今度、親娘でじっくり話してみれば?
晴美 ………うん…
茂 そうだ。この子(健斗を指して)今度ニゲランプリに出るんだって!
健斗 でねーよ。なんでそういう話になんの?
茂 あら違うの? あんた、お笑いやりたいんだったら、それはそれで、いつぺんちゃん目
指してみなさいよ。中途半端なんだから。
健斗 大丈夫、大丈夫。俺は俺でちゃんと考えてんの。
茂 そうやって、またごまかして… あんたこそ、耕ちゃんのガッツ見習った方がいいんじゃない?
健斗 はいはい。そうやって言ってるって…。今に、どっかーんとブレイクすつから!
茂 (晴美に) なにが、どっかーんよね(笑) じゃ、ここでなんかやってみなさいよ。
健斗 やだよ。
茂 さわりでいいから。

このような会話が続く(アドリブ)。その中で曲が入り明かり消えていく。

第七場 チャカーナのオフィス 10/25 22時

夜二十二時ごろ。チャカーナのオフィスにて。ゆかりが一人、携帯電話をかけている。

ゆかり もしもし…、あ、耕平さん、夜分ごめんさい。ちよつと声が聞きたくなっちゃって…(笑)
ありがとうございます。…はい、この前もちよつと申し上げたんですけど…。ペルーの件で
…。実は他にも希望される方がいて出発日が繰り上がりそうなんです。…そうなんですよ。

あまり申し込みが遅いと、今回のツアーには間に合わない可能性はあるんです。…できれば…そうですね…来月くらいには締め切りにさせていただきたいと思っています。…そうですね、申し訳ありませんが、…はい、ご家族で話し合ってみてください。それから、費用の件なんですけど、今回のツアーでは、遺跡の学術調査だけではなくて、地元の子どもたちとの交流や就学支援などのボランティア活動もやることになってまして…はい、その資金が必要なんです。…いえ、増額といっても、さほどではないんですが…まず頭金として…

電話の途中で、信彦がやってくる。書類を取りに来た様子。電話をかけているのに気づくが、何も言わずに、じっと話を聞いている。ゆかりは信彦がいるのに気がつき、電話をしなから楽し気に、無言のコミュニケーションをとっている。ふと見ると、そこに薫がいる。

なぜ、何も言わないんです？

…

なぜ、黙ってあんな電話をさせておくんず。

…

最近のゆかりさんのやり方は目に余ります。この前の説明会でもそうでしたけど、ちよつと強引すぎませんか。今の電話だって、わざわざこんな夜中にかけて、こんな話を聞かせるなんて…

…別に嘘をついているわけじゃない。

本当ですか？子どもたちとの交流も就学支援も、結城さんを参加させるために、あとから決めたことですよね？

そういうわけじゃない。

…嘘です。

薫…きれいごとばかりじゃビジネスはできないんだ。これは遊びじゃないんだよ。継続的にある程度の量の参加者がいないと、ツアーは組めない。特に今回の発掘プロジェクトは、国の助成金をもらってる。募集したけど、少ししか集まりませんでした、じゃ済まないんだ。

…ビジネスって…ボランティアじゃなかったんですか。

…やってることはボラでも、運営する組織はあくまでビジネス。経営手腕が必要なんだ。だけど、参加者が、集まらないからお年寄りに声をかけるって、道義的に許されることなんでしょうか？

どこが悪いんだ？富裕層の高齢者というのは、経済的にも十分恵まれていて、有り余るほどの余暇も持っている。でも、それだけじゃ人の心は満たされない。俺たちは彼らに生きがいを提供して、その対価をいただいているだけだ。そのどこが悪いんだ。むしろ、生きる希望を与えているんだから、社会貢献じゃないか。

じゃあ、なぜ、きれいごとじゃすまない、なんていうんですか。

…それは…

本当は、資金繰りがうまくいってないんですよね？だから、考古学に興味のある若い人だけじゃなくて、最初は対象者にしていなかったおじいちゃんたちに声をかけ始めたってことですよね？参加者を増やしてもっと儲けるために…

…しかたがないんだよ。着実に利益を出していかなきゃ、このプロジェクトは頓挫してしまうんだ。俺たちの目標は、ある程度の規模での遺跡発掘を行うことよって、インカを中心とした古代アンデス文明の研究に新しい道筋をつけることだ。やっと具体的なツアーを組むところまでこぎつけたんだから、ここで諦めるわけにはいかないんだよ。

それはそうですね…

信彦 現地の子どもたちとの交流や支援も、確かにあとから追加したプログラムだが、もちろん誠実にきちんとして行う。素人さんを連れていくって言っても、向こうで不自由な思いはさせない。安全対策にも十分留意する。心配いらさないよ。
信彦 信じていいんですね？

薫 ああ。それに従来通り、若者の募集も続けて行う。そうだ。若いベンチャー企業から、出土品の解析に使う画期的なデジタル3Dスキャナーの共同開発の話がきてるんだ。
薫 共同開発？

信彦 そうだ。今までとは違う。これからの考古学はベンチャービジネスだ。…なあ、俺たちはこれからなんだよ。

薫 わかりました。…だけど、ゆかりさんのあのやり方は困ります。

信彦 ……そうだな。

薫 信彦さん…

信彦 ん…？

薫 ゆかりさんが入ってから、なんか変わりましたよね。

信彦 ……なにがいいいたんだよ。(思いついたように)…ああ、薫。

薫 はい？

信彦 もうすぐ月末だろ？支払い…頼むな。

薫 でも…もう父から借りるのだって限界です。

信彦 なんで？ 大丈夫だよ、可愛い娘が頼めば。…あと少しの辛抱だ。な、頼むよ薫。

薫 ……わかりました。

信彦 よーし。じゃもう帰ろう、一緒にどこかで飯でも…

薫 いいえ、今日は…わたしもうちょよっと思います。

信彦 ……そうか、じゃな。

信彦 信彦、帰っていく。薫、一人になると、少し逡巡したのち、意を決したように携帯を打ち始める。

曲が入り、ゆっくりと暗転

第八場 結城家 10/30 11時

昼下がりの結城家の居間。しとしとと雨が降っている。居間にはZampōhaなどのペルーの民族楽器などが飾られている。耕平が一人、手持ち無沙汰な様子で、ソファアに腰かけて、ペルーの写真集をパラパラめくっている。

晴美 (入ってきて) ……あれ？お父さん、今日また出かけるんじゃないの？

耕平 ああ…今日は中止になったんだ。

晴美 え？

耕平 雨だ…これじゃ、野外作業はできん。

晴美 ……ふーん…

耕平 ……おまえは？

晴美 私も…、GMの企画が通らなかつたらしいの。…それで、撮影延期。

耕平 ……そうか…

気まずい間

晴美

あの…

ピンポンと玄関の呼び鈴。晴美が玄関へむかう。玄関から客を迎える声がする。耕平の姉で神戸に住む保田誠子（67）と晴美が入ってくる。

誠子

お邪魔します。

耕平

なんだ、姉さん、どうしたの、急に？

誠子

実家に来るのに、急にも何もないでしょ。あら、ご迷惑だった？

晴美

いえ迷惑だなんて…

誠子

なに？その本。

耕平

いや、これはまあ（あわててしまう）今日、神戸から出て来たのか。

誠子

違うわよ、保田の家で不幸があったんで、一昨日、東京にきたの。せつかくだから、耕平

晴美

たちの顔を見てから帰ろうと思って。

耕平

そうだったんですね。（早く出かけちゃえばよかった）

誠子

（小声で）…べつによらなくたってよかったのに…

耕平

なに？

誠子

いや…

誠子

それに私が行くつていうと、必ずあんたたち、なんだか用事ができちゃうじゃない？

晴美

え？

誠子

だからね、こういうのはいきなり来た方がいいのよ。

耕平

…それは（よくないだろ）

誠子

晴美ちゃん、お茶くれる？（座りながら）

晴美

…あ、すいません。（お茶を入れに行く）

誠子

いやね、ダンナのお義父さんが亡くなったのよ。九十五歳。大往生よ。ま、きれいな死に

誠子

方だね。前の日までびんしゃんしてお酒も飲んでたのが、翌朝コロッと。あの家は士族

耕平

の家系だから。やっぱり昔の男は違うわよね。…ねえ、あんたも老いじたくとかそういう

誠子

の考えてる？

耕平

…老い支度？

誠子

もう六十六なんだから、当たり前じゃない。あんたが死んだらこの家の相続はどうするの

耕平

かとか。おたくは女の子ばかりで跡継ぎもないんだから、死に水はだれがとってくれ

誠子

るのか、とか。

耕平

死に水つて…縁起でもない。

誠子

（構わず続ける）ましてや、あんた熟年離婚で奥さん出て行っちゃったんだから、そうい

耕平

うこと、今からきちんと考えておかなきゃ、あとで大変なことになるわよ。

誠子

そんな大げさな…。

耕平

のんきねえ、あんたは。…私は、民生委員つて仕事柄、いろんな家族を見てきたの。晴美

誠子

だって、美香だって、今はまだそばにいてくれるでしょうけど、いずれは嫁に行つて出て

晴美

いっちゃうのよ…まあ、晴美は一度出て、また戻ってきたんだけど。

誠子

すいません…あの、どうぞ（お茶を出す）

晴美

はい。（飲んで）ふう…ねえ、さっきから思ってたんだけど…

誠子

はい？

耕平

これなに？（あたりに飾られた民族楽器を見て）

誠子

いやこれは…（あわてて片付けようとする）なんだったかな。

晴美

琴音がちよっと学校のクラブで…

耕平

ああ、そうだそうだ。

誠子

そう。（晴美に）今日は美香ちゃんは？ ああ、アルバイト？

晴美 はい…まあ。
誠子 あの子いくつになっただけ？ 三十五？六？
晴美 七です。

耕平 耕平、悪いこと言わないからさ、美香にだれかい人見つけてやって、さっさとお嫁に行かせた方がいいんじゃない？ 看護婦だとか税理士だとか、資格でもあるんなら、まあどうにかなるけど、三十七になってバイト人生じゃ、何の花も咲かないわよ。だいたい、あんたも奈津江さんも、末っ子だからって、あの子のこと甘やかすすぎたんじゃない？

誠子 …まあ、そういうことはあつたかもしれない…
晴美 (かぶせて) 晴美ちゃんはもう思う？
誠子 え？

耕平 あんただって心配でしょ？
誠子 いやまあ…。

晴美 そりゃ、耕平とあんたと二人続けて結婚失敗してるんだから…

誠子 …失敗…

耕平 だから、美香が臆病になるのもわかるわよ。だからこそ、家族がお尻たたかないと。世間様から見たらね、やっぱああいう家の娘はねくってことになるの。

誠子 ああいう家っていいかたはちよつと…

耕平 そもそも、六十過ぎて、奈津江さんと離婚するっていうのがおかしいのよ。昔つから、あの人、何考えてるのかわからないところあつただけね。…みつともないと思わないのかしらね。

誠子 ……

耕平 晴美ちゃん、あんたも人のこと心配してる場合じゃないわよね。再婚は？四十って言ったら、もう若くもないわね。

晴美 そうなんですわね。

誠子 そうよ。将来のことを考えたら。ずっと女一人ってのもね。甘つたれて、耕平のすねかじるのもいいけど、いつポツキリ折れるかわかんないわよ。…ねえ、誰かい人いないの？
晴美 でも…まだ琴音が小さいですし…

誠子 小さいうちのが、いいのよ。思春期になって、いきなり「この人が、今日からお前のお父さんだよ」っていわれでも、傷つくじゃない。犬だって猫だって、子どもの頃から飼ったほうがなつくでしょ。

晴美 そんなこと言われても、いい人なんて…

誠子 甘い！ あんたたち姉妹は、そろいもそろって、ふあふあふあ…。(ふあふあ)の房付きの飾り物を見て) あら？

耕平 (とりあげてかくし) ねえさんそれで？

誠子 どこまで話したかしら…そう、腰が定まらないと今に必ず後悔するわよ。だいたい、子どもの教育上よくないわよ。ほら、例の皇室の…りこさまの婚約者みたいに、銀行勤めたかと思うと、直ぐやめて大学院。それで法律事務所にしたかと思うと、今度は思いついたように留学。こういうのは、一番ダメ。あんたたちのお父さんみたいに、四十三年間、石部金吉で、学校一筋に勤め上げて。定年したって、腰をすえて堅実に家を守る。こういう男を見つけないさい。

会話の間に、なんとなく誠子の目を盗んで、さりげなくインカ関連の品を片づける挙動不審な耕平。「それみたことか」という白い目で耕平を見るシビアな晴美。そのうち、誠子が、二人の雰囲気を変ななを感じて。

誠子 ……なによ？

耕平 いや…
晴美 なんでもないです。

誠子 …
（居間の入口から、顔を出して）どうかしたの？

琴音 あら、琴音ちゃん？まあ、大きくなつたわねく

誠子 こんにちは…（小声で晴美に）だれ、この人？

琴音 あ、そうだ、琴音、宿題まだなんじゃないの？

晴美 え？…（空気を感じて）あ、うん。

晴美 じゃあちよつと見てあげようか。おばさん、すみません（琴音を連れて逃げるように出ていく）

耕平 …（姉さん、言い過ぎだよという目）

誠子 晴美には一度ちゃんと話しておこうと思つたのよ。あんたも、もっと娘たちに強く言わなきゃ。

耕平 …うーん。（ため息ともつかない声）

誠子 …ねえ、さつきから、あんた：様子がおかしいわね？

耕平 うん？

誠子 なに隠してるのよ？

耕平 いや、別に。

誠子 なにかあつたんでしょ。

耕平 ねえさんには関係ないだろう。

誠子 人が心配してるのに、そういう言い方はないでしょ。耕平、あんたこのうち出て外国に移住するんだってね？

耕平 なんて、姉さんが知ってるんだよ？

誠子 なんてだっていいでしょ。それもペルーだかなんだか、治安の悪い訳の分からない国に行くんだってね？

（耕平愕然とする。しばし間）

耕平 …（ためいき）そうだ。もう決めたんだよ。

誠子 自分がなにを言ってるのかわかつてるの？あんたは、この家の長男で跡取りなのよ。それが家を捨てて出ていくってどういうことなのよ。世間様にどういわれるかわからないの？みつともない。自分勝手もほどほどにしなさいよ。

耕平 …もういいかげんにしてくれないか。

誠子 なんですって？

耕平 跡取りって、いつの時代の話だ。昭和はとおの昔に過ぎて、平成だって終わったんだよ。

誠子 姉さんこそ、わけのわからないこと言わないでくれよ。

耕平 （耕平に言い返されたことにびっくり、黙り込む）

誠子 世間に何と言われようと、そんなの知ったことか。どこの国に行こうが、俺の自由だ。どこで何して生きようが、野垂れ死にしようが、もうほつといてくれないか。人の人生に口出しするな。

誠子 （啞然）

耕平、憤然と自室に戻つてしまう。晴美が二階から降りてくる。

晴美 あの、おばさん、なにかあつたんですか。

誠子 （黙りこくつてる）

晴美 お父さんは？

誠子 晴美ちゃん、おばさん帰るわ。

晴美 え？もう？

誠子 迷惑かけて悪かったわね。ええ、さぞご迷惑だったでしょ。余計なこと言って悪かったわね。なによ、人を馬鹿にして！そういうことなら、どうぞご勝手に。もうこんなうちに二度ときませんから。お邪魔様でした。

晴美 ちよつと、あの…

誠子 あんたもせいぜい好き勝手してればいいわ。それじゃね。(出ていこうとする)

晴美、ちよつと、あの、待って、おばさん、どうしたんですか？などと言いながら、なんとか止めようとするが、誠子は、もういい、あんたたちとは話したくないなど、怒り心頭。帰ってしまう。途中から、琴音が降りてきて、そつとドアの陰からおそるおそる見ている。

晴美 もう…なんなのよ！ なんで私がこんな目にあわなきゃいけないの？ ちよつとお父さん、出てきて！ お父さん！（父の部屋の前に行き、ノックするが返事がない。）もうヤダ。

居間で座り込んでしまう晴美。琴音がやってきて、母親に手を差し伸べる。

晴美 琴音。

琴音 大丈夫？

晴美 大丈夫じゃない。

琴音 ちよつと待ってて（携帯を出して電話をかける）もしもし、…うん、今からきて。ちよつとさ、大変なんだ。

晴美 誰にかけてんの？

琴音 はい。（携帯を渡す）

晴美 （電話に出て）健斗？うん…（ほっとして泣けてきてしまう）やだもう…うん…え、なに？ネット？炎上してる？どういうこと？…え！

健斗が玄関開けて入ってくる。

健斗 お邪魔します。(居間に入ってくる)

琴音 もう来た！

晴美 健斗！

健斗 いや、ちようど、こつちに向かっている途中だったんだ。ちよつとこれ見ろよ（携帯の画面を見せる）チャカーナのが、ネットで出てる。すごい騒ぎになってるぞ。強引に勧誘されたお年寄りが自殺したって…。うそ！ちよつと見せて！

晴美 その時、また玄関をガチャガチャ言わせながら、美香が入ってくる。

美香 お姉ちゃん、お父さんいる？ あれ、健斗来てたの？ もう大変なのよ、チャカーナが…

健斗 おまえもそれ見たのか？ とりあえず、耕平さんに確認してもらった方がいいな。今日は？ 出かけたのか？

晴美 ううん、お父さん、部屋にいる。

美香 あたし呼んでくる。お父さくん（父の部屋に向かいながら）おとーさくん…

その間に、晴美、健斗、琴音は、ネットの情報を見ながら、いろいろ話している。騒ぎの中、曲が入り、暗転していく。

第九場 喫茶ドロール 11/10 14時

喫茶ドロールにて。明かりが入る。

健斗が一人で店番しながら、動画撮影のリハーサルをしている。スマホの画面を見ながら何やらぶつぶつぶやいている。そこに美香がやってくる。

美香 (戸を開けて) どうも。

健斗 おう。どうした？

美香 なにやってんの？

健斗 (動画の説明を始めるが美香が珍しく乗ってこない) どした？

美香 うん、…大事な人と話すから。しばらく貸し切りにさせて。ね！(お願い)

健斗 (チャカーナの件だと察して) うん、いいよ。どうせ暇だ。

美香 サンキュ。じゃあ貸し切りの札(健斗に)

健斗 おまえそういうとこだけ、しっかりしてんな。

美香 (外で立っていた女性を招き入れようとする) さあ、どうぞ。

晴美と美香の母、耕平の別れた妻の奈津江(61)が入ってくる。美香、入れ違いに外へ。札をかけに行く。

健斗 あれ!…奈津江さん？

奈津江 健斗君、お久しぶり。

健斗 いやあくお久しぶりです! ああ、びっくりした。

奈津江 元気そうね。あら、マスターは？

健斗 ああ、親父、今日は、老人ホームの慰問で、マジックショーやりにいってます。

奈津江 あらすごいわね。茂さん、昔から、マジック得意だったものね。

健斗 はい。あ、どうぞ座ってください。…いや、でも、五年ぶり?くらいですか？

奈津江 …そうね…六年ぶりかしら。…離婚して以来だもんね…(笑)…健斗君、いつもうちの子

たちがお世話になってるんだって?どうもありがとう。

健斗 いえ、どうってことないです。あ、でも、なんか見違えちゃったなあ…

奈津江 そう?

健斗 なんかつっかり若返っちゃって!

美香 (適度なところで戻ってきていて) ね!私も、びっくりしちゃった!!私だって、お母さんと会うの六年ぶりだもん。

奈津江 (笑) あらら…お世辞でもうれしいわ。二人ともありがと。

健斗 いや、ああ…今日は、奈津江さんどうしたんですか？

奈津江 それがね、美香からメール貰って、それで驚いて飛んできたの。

美香 うん。あたし…いろいろ考えたんだけど、もうどうしていいかわかんなくなっちゃってさ。

健斗 それで。(健斗に振る)

健斗 …そうだな…こういう時は奈津江さんだな…。とりあえず、なんか飲みますか。なにがいいですか？

奈津江 じゃあ…久しぶりに、…ミルクセーキ。

健斗 お、なつかしく。好きでしたもんね。

美香 うん、…なつかしいね(当時を思い出して、ちょっとしんみり)

健斗 お前は、アイステイーだろ。
美香 あたしもミルクセーキ。
健斗 …おっけい。(美香の気持ちを探し、厨房に行き作り始める)
奈津江 それで、お父さんどうなの？
美香 うん…家じゃほとんど口を利かないの…。むすつてしてて、食欲も全然ないし。相当ショックだったみたい。
奈津江 そのインカのグループには連絡してみたの？
美香 全然ダメ。何度電話しても全然でないし、メールもだめ。
健斗 …ツイッターも閉鎖されてたな。(戻ってきて、また厨房へ)
奈津江 お父さんは連絡取れてるのかしらね？
美香 わかんない。
健斗 だけど、あの自殺の話は、ガセネタだって噂もあるんだろ？
美香 うん、そうやって書いてるネットの記事もあるし、逆にもっとひどいこと書いてるサイトもある。
奈津江 なんて書いてあったの？
美香 一千万近く巻き上げられた被害者がいるとか、バックに外国の犯罪グループがついてるんじゃないか、とか…ね、健斗？(奥に向かって)
健斗 俺も読んだけど…どうなんだろうな…
奈津江 お父さん、お金はとられたの？
美香 さあ…多分、大丈夫だと思うけど…
奈津江 そう…。なんにしても、ペルーに行く前でよかったじゃないの。
美香 まあそうだけだね…。でも、お父さんあきらめてないみたい。
奈津江 なんでそう思うの？
美香 だって、家にあるインカグッズ飾ったままだし。時々、部屋で、向こうの言葉、練習してる声が聞こえるもん。
奈津江 そう…。お父さん、一度信じたら頑固だもんね…
美香 …うん、信じてる。(あの人たちのこと)
健斗 (ミルクセーキを持ってきて) はい、おまたせ…。そういうの耕平さんらしいな。
美香 でも、お姉ちゃんはずい怒ってる。家族の言うことはきかないで、あんな他人を信じたりにして…って。
健斗 だな。
奈津江 晴美はね、怒ってるんじゃないで、傷ついてるのよ、きつと。あの子らしいわね。
健斗 うん、確かに…
奈津江 神戸の誠子おばさんは、あれからなんか言ってきた？
美香 うん！すごかった！ 怒りまくって電話かけてきて、「だからおばさんが言ったとおりでしよ、すぐに警察いきなさい！」って！
健斗 すぎえな。
美香 あんだけケンカして「もうしらない、二度とこない」って言ってたらしいのに、ほんとはタフっていうか、めげないよね。
奈津江 誠子さん、なんだかんだいっても、お父さんのことが心配でたまらないのよ。
美香 だけど、きつすぎ！ お父さん、元氣ないの。あの電話のせいもあるんじゃないかと思うくらい。
奈津江 そうね。ちよつとそれはつらいかな…
健斗 なあ…、この前から気になってたんだけど、なんでその誠子さん？…耕平さんのお姉さんが、ペルー行きのこと知ってたんだ？
美香 それがね！ ほら、お父さん、渡航の手続きに必要なだから、とかで、区役所に住民票取り

に行っただって。そしたら、ちょうど受付にいたのが、桃二小で私と同じクラスだった山口君って人で…

健斗 ああ、おれ知ってる！ サッカークラブの山ちゃんだろ？

美香 そう！山ちゃん！ でき…住民票取るのに、理由を書かなきゃいけないじゃない？で、その時、お父さん真面目だから詳しく話しちゃって。で、その…

健斗 …なんとなくわかったぞ。その山ちゃんが、誠子さんの知り合いだった、とかいうんだろ？ そうなの！よりによって、お母さんが、誠子おばさんと同級生で親友だったんだって！それで、なんかのついでの話で、めぐりめぐっておばさんにまで伝わったってことなのよ。ものすごい偶然っていうか…最凶ネットワークだな。個人情報大丈夫か？

美香 あいつ、昔からおしゃべりだったんだよね。それに、おばさんたちに、プライバシーという概念はない。

奈津江 そんなことないわよ。だって、狭い地元のことだもの。変な偶然が重なっちゃっただけよ。だけど、最悪のタイミングだったなあ。あーあ…(どうしようこれから)

奈津江 …ねえ美香…お父さんのこと、お母さんに任せてくれないかしら。あてがあるの。え？

奈津江 私ね、今、高齢者の介護施設に勤めてるんだけど、そこに顧問の弁護士さんがいてね。とっても面倒見のいい方で、いろいろ相談に乗ってくれるの。そのインカのグループのこと調べてもらえるかもしれないわ。

美香 ほんと！ もしできたら、すごい助かる！

健斗 へー、今、介護のお仕事してるんですか？

奈津江 実はそうなの。資格も取ってね。その辺は、まあおい話そうと思ってたんだけど。

美香 お母さんが資格？(専業主婦だったのに意外！)

奈津江 そうよ。…お父さんとも久しぶりにゆっくり話したいと思ってたのよ。大丈夫。私に任せて。いい機会だし、お父さんの気持ち、ちゃんと聞いてみるわ。

その時茂が帰ってくる。おしゃれないでたち。

茂 ただいま。どうしたの、貸し切りって…(奈津江に気づき)あら？もしかして奈津江さん？

奈津江 茂さん、ご無沙汰してます。

茂 やだ、すっかりきれいになっちゃって！誰かと思っちゃった！

健斗 だろ？おれもびっくりしてさ…

奈津江 茂さん、お久しぶりです。マジックやってきたんだって？

茂 そうなのよ。はいこれどうぞ(花束を渡す)

奈津江 まあ、きれいな花束。どんなマジックやったの？

茂 あら、見たい？

茂 みんなそれぞれのリアクション。「みたいみたいなど」じゃいくわよ。(楽しくマジックを披露する)

と、盛り上がる中、曲が入り、照明が変わっていく。暗転。

第十場 結城家 11/17 15時

夕暮れ時、耕平が一人、居間でテレビを見ている。(テレビの画面は見えず、音声だけが聞こえる)

レポーター(声のみ) えー私は今、その法人インカプロジェクト「チャカーナ」の事務所前に来てい

ます。現在、事務所内では、七く八人の若い男女が苦情の電話などへの対応に追われている様子がうかがえます。団体代表とされていた国立民族博物館の大眞正夫教授によると、教授は、団体の名誉顧問として、考古学的な監修をするのみで、団体の経営や実務には全くかわりがなかったとのこと。運営については、もっぱらプロジェクトリーダーの庄司信彦氏と、団体の顔であり、アイドル的存在の小島ゆかり氏が、中心となって行われていたものと思われれます。この団体は、ペルーでの遺跡発掘調査を目的とし、2016年に設立された団体ですが、三カ月ほど前から、大学生や高齢者に対し、強引な勧誘をしているとの声があがり、SNS等で話題となっていました。また、日本学術財団の助成金を不正に流用している、との噂もあるようです。なお、今のところ、逮捕の動きなどはないものと思われれます。番組では、以前この団体のメンバーだったという方から、お話しを伺うことができました。こちらをご覧ください。

舞台上サスの中に、女性が浮かび上がる（ややシルエット気味となり、顔は暗い状態）

薫

はい、とにかく参加費が高いので、普通の人は簡単に行く気にはなれないですよ。それで、勧誘の際には、女性幹部が、わざと自分がかわいそうに見えるような不幸な話をして、相手の同情をかったり、色仕掛けじゃないですけど、もう甘えたり、おだてたり…、ええそうです。そんなふうな気を引いて、プロジェクトに参加させようと口説いてる人もいました。特にあの…（すこしためらい）小島さん…なんかは、とても強引で…夜中に何度も電話したり、家まで押しかけたり…ひどかったです。…はい、金銭的にもかなり行き詰っていたようで、参加者に先にお金を出させて…それだけじゃ足りないから、私たちからも無理やりお金を集めました…ええ、そうなんです…

耕平、テレビを切る。と同時に女性の姿が消える。しばし考え込む。間。

玄関の呼び鈴が鳴る。耕平はため息をつき、玄関に向かう。戸を開けるとそこには、ゆかりと信彦が立っている。そのやり取りは、カゲ声で行われ、やがて、三人は居間に入ってくる。

（カゲ声）

はい。

耕平
突然申し訳ありません。庄司です。あの…どうしてもお話しをさせていただきたくて、うかがいました。少しよろしいでしょうか。

（少し間）…どうぞ…（ドアを開ける）

耕平、無然とした様子で、しかし冷静に居間に入ってくる。そのあとに、やはり冷静で堂々とした様子の信彦が続く。少し遅れて、こわばった顔のゆかりが入ってくる。

信彦
このたびは、ご心配をおかけし、誠に申し訳ありませんでした。本日は、そのお詫びと状況のご説明のためにまいりました。

…まあ、（ソファを示し）掛けたらどうだ。

耕平
失礼します（座る）

信彦
（ゆかりが部屋の位置口でまだ固まっているのをみて）きみも座りなさい。

ゆかり
（硬い表情で）私は結構です。

耕平
…そうか。…では、聞こうか。

信彦
ありがとうございます。まず、ネットで拡散している情報についてですが、六十代男性の参加希望者を、強引に勧誘し、自殺に追い込んだという…

ゆかり

そんなの、でたらめです！ 私、そんなことしてない：

信彦

(ゆかりを制し)その方は、もともとどうつの症状があり、精神科に通われていたそうです。この小島が担当しておりまして、なんだか研修にもいらっしやいましたが、体力に自信がない、ということ、すでにお断りのご連絡を頂いておりました。それから、ひと月以上たってから、ご家族からお亡くなりになったと、ご連絡を頂きまして：。私たちが原因だと誤解されていたんです。

耕平

しかし、自殺したのは本当なんだろう。

信彦

はい。

耕平

断られた後も、君たちから連絡を取っていたんじゃないのかね？

信彦

：小島は、数回、電話で話したそうです。しかし、その時には、近況を聞いたり家族の話を知ったりしただけで、勧誘めいたことは言っていないと言っています。

耕平

：うん：

信彦

私は、小島が正直に言っていると信じています。：確かに我々の団体には、少し行き過ぎたところがあったのかもしれませんが。研究を進めることに夢中になるあまりに、強引に感じられる部分もあったと思われます。：しかし。命にかかわるような非道なことはしていません。

耕平

：ゆかりくん、君はどう思うんだ。

ゆかり

：私：わたし：もう：わかりません。：

耕平

うん。

ゆかり

その：高木さんっていうんですけど、その人、私が担当することになって、最初会った時には、えらそうで：下に見られているんだなって感じて：苦手なタイプ：でした。：でも話しているうちに、この人すごくさみしいんだな、ってわかってきて：

耕平

うん。

ゆかり

でも、研修の時、すぐ疲れちゃって：全然やる気なさそうだったので、ああ、この人、発掘は無理だな、って、感じてたんです。で、私から「もうやめますか」っていつて、一度終わってたんですよ。

耕平

だったら、どうして電話で話すことになったんだ？

ゆかり

私が電話したんじゃない！ しばらくしたら、向こうからかけてきて、最初は家族の愚痴を聞いたりしてたんです。正直迷惑だったけど：。でも：

耕平

そのうち参加すると言いだすかもしれないから、キープしておいたってことか。

ゆかり

いや：あの(信彦をうかがい)はい：まあ：。でも、そのうちしつこくなってきて、今度会おう、一緒にご飯食べよう、おごるからって：言いだして

信彦

おい：(よけなこといな)

ゆかり

どうせお金に困ってるんだろう、だったら、少し援助してやってもいいからって：

信彦

こっちはてきとーに誘って、つないどいたつもりだったのに：なんか怖くなってきて：

耕平

なにをいつてるんだ、おい。

信彦

：いいから、(ゆかりに)話してごらん。

ゆかり

いっぺん会う方がいいか、とも思ってたんですけど：これはヤバいかなって気もして：着信拒否しちゃったんです。そうしたら、それから一週間くらいして：あの人自殺したって：

信彦

(泣き出す)私が悪いんじゃない。何もしてない。って、思ったけど、ああ：もう、やばいやばい：って：

信彦

ちよっと：ゆかり。結城さん、今回のことは：小島の対応は、やむを得ないことだと思っています。何度も申し上げますが、私たちの勧誘行為自体が原因で引き起こした事故ではないんです。着信拒否したのだから、向こうに問題があったからで：

ゆかり

私たち：行き詰ってたんです。インカは私たちの夢だった。やっと私たちの計画が通って、

耕平
ゆかり

助成金貰えることになって…やっと発掘に行けるって思ったのに！ なのにするのがいっばいで…人は全然足りないし、お金ももつともつと必要で…
そんなに焦らなくても、じつくり落ち着いてやれば…

わかってないな！ 今じゃなきやだめなの！ 助成金降りたんだから、ここががんばなきや、おしまいなんだよ。あんたみたいに余裕があつて、のんきに生きていける人にはわかんないの！ お金がなくて、必死でバイトして、それでもたんなくて、人をだましてかき集めて…でもやるしかないの！

耕平
信彦

…
結城さん。私は、この計画にかけています。私だけじゃない。こいつも、ついてきてくれるやつらも、みんなそうです。文化事業というのは、なかなか世間に理解されないし、多くの困難が伴います。しかし、誰かがやらなきやいけないんです。私は学生時代から、インカの研究に取り組んできて…わかったことがあります。遠い昔、インカは黄金の王国でした。人々はみな、富を求めてこの地を目指し、そしてたくさんの夢をかなえました。それはいまでもかわらないんです。黄金の宝はすでに掘り起こされています。でもその様々な遺構からは、人類が今まで知りえなかったたくさんの知識、技術、歴史的価値、未来につながる素晴らしいお宝が眠ってるんですよ。それを私は手に入れたい。…私も、こいつも、子どもの頃から恵まれない環境で育ちました。だからこそ、それを今、ひっくり返したい。負けたままで終わらせたくない。何を犠牲にしても、絶対にやらなきやダメなんです。

耕平
信彦
信彦

…なにをいっとるんだ、おまえたちは…
…
かなうさ、おまえたちの夢は。安心しなさい。…たしかに今がチャンスなのかもしれない。けどなあ…おまえらいくつだ？ まあだ若いだろう。人生はこれからじゃないか。助成金がどうした？ 今年目標に届かなくなつて、別に死ぬわけじゃない。うまくいかなかつたら、もう一度原点に戻つて、またやりなおせばいいじゃないか。何年かかつても、絶対にやりとげればいい。…このじじいも、及ばずながら、助てやろう。…どうだ。

信彦
耕平

…
だまして集めた金に関しては、ひとりひとり交渉して、きちんと借借書を作つたほうがいいだろう。それで、何年かかつても返せばいい。おれの金も、それまで、おまえたちに預けておく。…それでいいか？

信彦
耕平
信彦

…わかりました。ありがとうございます。
インカに行くんだらう？ それまで身体を鍛えて待つてるぞ。
…はい。
気がつくと、晴美が部屋の入口に立っている。

晴美

ただいま。

耕平

なんだ…いつからいたんだ？

晴美

だいぶ前からよ。白熱してたんで、邪魔するのも悪いかな、と思つて待つてたの。

耕平

…そうか。

晴美

お客さん、連れてきたの。

晴美がうながすと、奈津江が入ってくる。後ろには美香もいる。

奈津江

ご無沙汰しています。

耕平

おまえか、どうしたんだ？

美香 あたしが連絡して、来てもらったの。
耕平 ……そうか。
信彦 ……あの…では、私たちはそろそろ失礼します。結城さん、今日はありがとうございます。
耕平 ああ。
ゆかり 耕平さん…ありがとうございます。
信彦 うん。またいつでも来るといい。
ゆかり はい。
信彦 あらためて、ご連絡いたします。では…

信彦、ゆかり帰ろうとするところを耕平が呼び止めて

耕平 新庄くん…薫くんはどうしたんだ？ チャカーナをやめたのか。
信彦 ……はい…
耕平 もう一度よく話してみたらどうだ？
信彦 ……そうですね。連絡してみます。…では…
耕平 うん…

信彦、ゆかり帰っていく。美香玄関まで送っていく。美香はそのまま自室に戻り、軽く着替えている。

晴美 お母さん、座つてよ。コーヒーでいい？
奈津江 ありがとう。

晴美はキッチンへ。耕平と奈津江二人きりになる。

耕平 ……かわりはないか？
奈津江 変ったわよ。いろいろとね。
耕平 まあ、うん……そうだな…。
奈津江 この前、神戸からお義姉さんいらつしやったんだって？
耕平 ……その話聞いたのか？
奈津江 美香がメールで知らせてくれて…。それで来たの。
耕平 ……ふーん…

会話が續かない。間。晴美が戻ってくる。二人の様子を察して…

晴美 ……ねえ、ちょっと頼まれてくれない？
奈津江 なあに？
晴美 琴音、今、塾に行ってるの。帰り心配だから、迎えに行つてやってくれない？二人で？
耕平 なんだ…いつも一人で帰ってくるだろう？
晴美 いいじゃない、たまには。きつと喜ぶわよ、あの子。ね？ まだ時間はたっぷりあるから、二人でゆっくり歩いて、行つてくれば？
奈津江 ……そうね、じゃあそうしましょうか。(たちあがる)
晴美 ほら、お父さんも。
耕平 ああ…(しかたなく立ち上がる)
美香 (戻ってきて) あれ、どうしたの？
晴美 いいからいいから…。二人でお出かけよ。

美香 (察して) ああ、いいんじゃない。いってらっしゃい。

美香、二人を送り出してすぐ戻り。

美香 お姉ちゃん。

晴美 なに？

美香 やっぱお父さんって、校長先生だね。

確かに、さつきのお説教つたらすごかったね、「それまで身体を鍛えて待ってるぞ。」だって(笑)、などなど、おしゃべりをする中で、曲が入り、暗転。

第十一場 近所の土手沿いの道

夕焼けの中、歩きながら話している耕平と奈津江。途中で腰かけて話す。

耕平 そうか…。介護士の資格を取ったのか。

奈津江 うん、働きながらやっとね。おかげさまで…

耕平 …ふーん。たいしたもんじゃないか…

奈津江 でもね、外にでて働いたおかげで、お父さんの気持ちも少しはわかったわ。

耕平 …そうか。

奈津江 退職してどう？ 少しは慣れた？

耕平 …ああ。

奈津江 お昼、食事はどうしてるの？

耕平 晴美が作っておいてくれることもあるが、そうでないときは外食したり…たまには自分で作ってみたいな。

奈津江 へー、お父さんが。

耕平 やればできるもんだな。

奈津江 少しは、私も気持ちも分かった？

耕平 なにをいっとるんだおまえ…(と言いかけてやめる)…まあ、そうだな…(ひと間)今年の元旦にな。

奈津江 ええ

耕平 朝、いつものように自分で郵便受けに取りに行ってみたら…。年賀状が、ほんの…ばらばらっと数枚しか入ってないんだ。数えたら、十二枚。そのうちおれのが六枚。たったの六枚だぞ。

奈津江 五年前は、三〜四百通、あったわよね。よく自慢してたわ、お父さん。

耕平 もしかしたら、配達が遅れてるんじゃないかと思ってな、昼過ぎまでずっと待ってた。なんども玄関まで行って…結局その日、郵便屋は来なかったよ。…惨めだった。…おれは終わったんだな、としみじみ思ったよ。…もう現役じゃない、社会から離れるっていうのは

耕平 こういうことか、と実感した。

奈津江 そうね。私には親戚と友達で、毎年十枚くらいしか来なくて、…いつも馬鹿にされたわ(あなたに)。

耕平 (苦笑い) うん。まあな。…おれの価値もこんなもんだ。

奈津江 そんなことないわよ。人生まだまだ先があるじゃない。

耕平 うん。…それで、それからしばらくして、あの子たちに会ってな、初めは全く興味なんかなかった。だが、文献を読み始めたら、大変なもんに首をつっこんだな、と思った。

奈津江 大変なもの？

耕平 これは奥が深い。あと何年あるかわからない、おれの人生のすべてをかけても、爪痕を、ほんの少しつけることもできないかもしれない。

奈津江 うん。

耕平 だからこそ、これはいい、とピンと来たんだ。これなら、あと、もし間違つて、何十年か生きる羽目になつても、死ぬまで退屈することはないだろう。つてな。

奈津江 ……いいんじゃない。第二の人生の始まりね。

耕平 第二なんてもんじゃない。ただの人生のおまけみたいなもんだな。

奈津江 おまけ？

耕平 教師をやつて、おまえと一緒になつて、娘たちを…まあ立派じゃないかもしれないが、無事に育て上げた。おれは人生に何の悔いもない。残りの人生は…グリコのおまけだ。

奈津江 (笑) そうね… なんだかそう考えると楽しいわね。

耕平 ああ…。

奈津江 私、実は人に頼んで調べてもらったんだけど…。意外にも、あの人たち、ちゃんとした学者さんらしいわよ。

耕平 そうか。

奈津江 新庄さんつて、山形大出身で、古代アンデス文明の新鋭つて呼ばれてたそうよ。在学中は、大貫教授と、「クントウル・ワシ」つて有名な遺跡掘つてたんですつて。(報告書を出して見せる) ゆかりさんのことも載つてる。これ、報告書よ。あとでゆっくり読んでみて。(渡す)

耕平 すまんな。

奈津江 よかったわね。…これから、どうやつて立て直していくのかしらね。

耕平 なるようになるさ。

奈津江 へ〜(お父さんがね…そんなこというなんて…)

耕平 ……ケ・セラ・セラだ。

奈津江、柔らかに笑い、シャンソンを口ずさむ。「ケ・セラ・セラ」

耕平 ……うまいもんだな。

奈津江 私ね、シャンソン習つてるの。たまに知り合いの人のお店で歌うこともあるのよ。

耕平 ほう……たいしたもんだ…

奈津江の歌うケ・セラ・セラ(録音) かぶさつてきて、暗転していく。

第十二場 結城家の居間 2020年 5月7日10時

晴美と健斗が居間の片づけをしている。

ソファーやテーブルを動かしたりと忙しい様子。

ねえ、ソファ動かすからこつち持つて。

え、なに？(ぶつぶつ言いなながら手伝う) なんで俺が手伝う羽目になつてんだよ？

いいでしょ。どうせ暇なんだから。

暇じゃねえし…

ほら、この椅子がこつち。それから、これも(といろいろ指図する)

ん…でき、これからなにやんの？

さあね。…ねえ、椅子カバー、これとこれ、どっちがいいと思う？

え？…どっちでもいいんじゃない？

晴美 もう！頼りにならないんだから…
健斗 おれにカバーの好み聞かれたって…
晴美 いいわよもう！じゃ、こつちにしよう。
健斗 ちよつとおまえなあゝ

ピンポンと玄関の呼び鈴が鳴る。

晴美 はい！ ほら、健斗出て！
健斗 なんておれが…
晴美 早く！忙しいんだから…。
健斗 ったくもう…。(ぶつくさ言いながら玄関に向かう)

ぶつくさ言いながら玄関に行く健斗。晴美はキッチンへ。

カゲ声

健斗 はい (ドアを開ける)
琢磨 晴美ちゃんいます？
健斗 晴美ちゃんって。
琢磨 (なんかここ少ししゃべっても可。そのあと) 晴美ちゃん (奥に向かって)

健斗が戻ってくる。とそこへ、呼ばれて晴美も戻ってくる。

健斗 なんかちやらちやらした男(ヤツ)が来た…
琢磨 (入ってきて) 晴美ちゃん、遅くなってごめん。
晴美 ううん、まだ時間前よ。
琢磨 いやいや、もっと早く来て、模様替えとか手伝うつもりだったんだけど…
晴美 そんなことまで、井上君にさせられないわよ。
琢磨 んな遠慮することないじゃん。
健斗 …あのゝ

仕事休みなのに来てくれるだけで十分よ。

琢磨 そりゃあ、ほかならぬ晴美ちゃんの頼みだからね。

健斗 ちよつと…あの

晴美 さくすがあゝ やっぱり頼りになるわね。

健斗 おい…

琢磨 うん、いつでも頼ってよ。

健斗 おくい！ 人をおいてけぼりにすんな。

晴美 あら健斗。忘れてた。

健斗 忘れんじゃねえ。

晴美 ごめんごめん(笑)…井上君、この人ね…

琢磨 ああ…、あの例の…

健斗 例のってなんだよ。

琢磨 ああ、失礼。君の話はよく晴美ちゃんから聞いてたもんだから。

健斗 え？

晴美 そう？話したっけ？

琢磨 うん、しよつちゅう聞いている。君が思ってるよりもずっと。

晴美 へえ…

健斗 …なに話してんだよ。
別に。

晴美 例えば、子どもの頃の話とかね。
晴美 そんなこと言ったっけ？

琢磨 まあまあ…とりあえず、健斗君だったよね？ 僕は、雑誌「La vie est belle」^{ラ ヴェル ビエイ}（フランス語で素敵に暮らしたの意）のカメラマンで井上琢磨といます。

晴美 えーと、私の料理の写真撮ってる人。
健斗 …ほう…

晴美 いつも、すごいお世話になってんのよ。

琢磨 いや、僕の方こそ、晴美ちゃんには、いい写真撮らせてもらってるよ。

晴美 またまた、うまいんだからもう…。

琢磨 いやあ、ほんとのことですよ。どうぞよろしく。

健斗 で、それはいいけど、なんでその雑誌のカメラマンさんが、今日、この家に来るんですか？
晴美 今日、お父さんの撮影なの。

健斗 へ？

ピンポンと呼び鈴の音。

晴美 はーい。ほら！（健斗に）

健斗 わかってるって！…どうせ俺だろ…

再び、ぶつくさ言いながら玄関を開けに行く。玄関を開けて、話している気配。

晴美 そうだ、井上君に聞いてみよう。ねえ、これとこれ、どっちがいいと思う？（椅子カバー）

琢磨 断然こっち。

晴美 そうよね！やっぱ頼りになるう。

健斗 （戻ってきて）おい…晴美…例のチャカーナがきた…やばくねえか？

信彦 （入ってきて）失礼してよろしいですか？

晴美 ああ…はい、どうぞ。

信彦 今日は、場所をお借りして、申し訳ありません。

晴美 いえ…父がここでやりたいって言ってるんだから、仕方ありません。（つつけどんに）
琢磨 晴美ちゃん。（そんな言い方失礼じゃない？）（信彦に）初めまして。今日カメラを回させていただきます、井上です。晴美ちゃんの仕事仲間です…

信彦 ああ、お話はうかがっています、インカプロジェクト、チャカーナの庄司です。

琢磨 どうも、僕、普段はスチール中心なんで、ムービーは少々畑違いなんですけど、まあなんとか…。最近はどうちだけとか言ってるらしいね。それに彼女のお父さんが出演されるんじゃないかな、ってことで。

信彦 そうですか…。それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

琢磨と信彦は会話を続けている。健斗、晴美は影でこそつと会話。

健斗 （琢磨の様子になんとなく落ち着かない健斗）ちょっと、おい、晴美、なにがどうなってるんだ？

晴美 それがね…きょうこれから動画撮るんだって。

健斗 動画？ってなんの？

晴美 お父さんがインカの講義やるの。ネットで。

健斗 え？それってチャカーナの？

晴美 うん…。

健斗 つまり、チャカーナの動画に耕平さんが出演するってことか？

琢磨 いや、実はニコ動にあげる動画を撮るのは初めてなんです。

健斗 ニコ動にあげんのかよ？

晴美 なんかね、そうみたい。

信彦 なるほど…。説明会などで使うビデオはいままで専門の業者に出していたので、うちが自前で動画を制作するのは、実は初めてなんです。今は少しでも、予算をけずっていかなくてはなりませんから…

健斗 なんだよ、あいつら素人かよ。

晴美 なによ、えらそうに…

健斗 そういうのやるなら、先に俺に言えよ。
晴美 え？

健斗 こう見えても、俺、ユーチューバーだぜ。

晴美 売れてないけど？

健斗 まーな。だけど、一応わかってるってこと。

晴美 ふーん。

健斗 チャカーナは、前に炎上してんだから、それなりに細心の注意した方がいいんじゃないか？

健斗 耕平さん出演するとか大丈夫なのかよ。

晴美 うん…。私もそう思うんだけど、きかないのよね。(お父さん)

琢磨 晴美ちゃん、お父さんの準備はどう？

健斗 お父さん…

晴美 はーい、今呼んでくる。

晴美、耕平を伴いやってくる。

どうもご苦勞様です。

結城さん、今日はお世話になります。

庄司君、昨日話していた「ナスカ」の仮説についてだが…

はい、私もあれから考えましたが、講義全体の中でもナスカは大きなトピックですし、写真や絵をふんだんに盛り込むことも考えると、結城さんのおっしゃる通り、今回は取り上げず、来月の特集に回してもいいんじゃないかと、思いました。

うん、そうだな…いいんじゃないか。じゃあ…(琢磨に気がつき) きみは？

お父さん、いつも私の料理の写真を撮ってくれてる井上君。

お父さん、どうも初めまして。

お父さん？ ……。いやどうも(なんとなく健斗を気にしつつ健斗に) ああ、お前も来たのか。えーと、井上さん。娘が、いつもお世話になり、ありがとうございます。

いいえ、こちらこそ。今日は、僕がムービーをやらせていただきます、つと…さあて…とりあえず準備もあらかたできたんで、ちよっと一休みしますか。

耕平 あ の、庄司君、今日は、ゆかりくんは？

信彦 はい、しばらくは資料集めと関連書類の作成にかかりきりで…

耕平 そうか、薫君もいないしな。

信彦 ええ、他にもやめてしまったメンバーが何人もいますし、とにかく人手が足りないんです。それに…

耕平 うん？

信彦 これは、ゆかり本人の希望でもあるんです。団体内部の仕事をやりながら、もう一度、自分の原点に立ち返って、しっかりと研究をやりなおしたい、ということだと思います。

耕平 そうか…

信彦 それで…実は大貫先生とも相談して、来月から、正式に私が代表になることになりました。他の役職も一新し、新体制で立て直していくつもりでおります。

耕平 うん。

信彦 つきましては…結城さん、お願いがあります。

耕平 …

信彦 我々の団体に加わっていただけませんか？

耕平 え、だって、お父さん、ずっと前から参加してるじゃない？

信彦 今までは、発掘ツアーのいち参加者として、いろいろとお手伝いいただいておりましたが、正式にチャーカーナのメンバーとしてお迎えしたいんです。

晴美 なにいつてるのよ。

信彦 この、インカ講座をネット配信するという計画も、結城さんの発案ですし。

晴美 それとこれとは別でしょ。

信彦 結城さんは、もううちにはなくてはならない人なんです。これからも、ずっとお力をお借りしたいんです。

耕平 (突然、くすくす笑う)

晴美 お父さん？

耕平 いや…なんだかてれるな…(笑)うれしいじゃないか、なあ？お父さんみたいなロールに、そんなこといつてくれるなんて… まあ、正直、そんな大げさな話になるとは思ってたが…。いいんじゃないか？それで。なあ、晴美？

晴美 ……。

耕平 晴美、いいんじゃない？ 耕平さんの好きにさせてあげれば？

琢磨 賛成。お父さんかっこいいっすね。

健斗 なあ。

信彦 どうぞよろしくお願いします。

晴美 なんなのよ、みんなして！ 無責任よ、そんなの！

健斗 晴美。

晴美 だって、この人(信彦)まただましてるかもしれないし。

耕平 おまえ、ちよつと誠子おばさんに似てきたんじゃないか？

晴美 やだもう、ちよつと…

信彦 すみません…あの、そのだますっていうのは、もう勘弁してください。

晴美 (言いかける) だけど…

琢磨 まあまあまあ…、細かい話はあとにして、とりあえず撮りませんか？ね、晴美ちゃん？

健斗 どうでもいいけど、さつきからなれなれしいなくあんた。晴美ちゃんとかお父さんとか…

琢磨 はいはい、いいからもう、じゃお父さんこちらに座って…あーとピンマイクは…きみちよつと(健斗に)これは、(と説明しようとする)

健斗 知ってるから。(さつと受け取って、作業を始める)

琢磨 ほう…(とといった感じのやり取りがあつて)

信彦
健斗
琢磨
健斗
琢磨
健斗

じゃあよろしくお願いします。

まった！

え？

ちよつと地味じゃねえか？

うーん、確かに：どうするかな？（などなど）

こういうのは、見た目のインパクトが大切だから：

等々話しながら、照明が消えていく。舞台上スクリーンが現れる。3.2.1とカウントダウンの絵がうかび、それが終わると音楽と共に映像の中に耕平が現れる。（ネット配信動画「インカ講座」〜チャカーナ^{〔1〕}）

耕平

え〜みなさん、初めまして。インカプロジェクトチャカーナの結城耕平です。これから、三カ月間、十回の講義の中で、インカ文明を中心とした古代アンデス文明の謎に迫ってきたいと思います。まず、みなさん、インカと聞いてどのようなイメージを持たれるでしょうか？…きつと遠い地球の裏側にあつて、神秘的といえれば聞こえはいいですが、まあ、どこことなく怪しくて、本当に存在したと言うよりも、伝説の中だけにあるような謎だらけの国、という印象ではないでしょうか？ 実は私自身も、ほんの一年前までは、インカ文明はおろか、遺跡発掘というものにすら、全くなじみがなかったのです。

我々のような昭和の人間というものは、現役時代は、毎日、仕事や日常の雑務に追われ、ただ黙々と働き、家族を養う、これが人生だと、そう考えておりました。たまの息抜きは、仕事の後の赤ちようちゃん。人によっては、付き合いがてらのゴルフコンペや麻雀大会。それがあたりまえの時代でした。

ところが、昭和はとうに過ぎ、いつのまにか平成も終わり、今、令和という新しい時代を迎えています。高度成長期には、やれ働け稼げ、と我々のおしりをたたいていた政府が、今度は、余暇を充実させろ、セカンドライフを生きて過ごせ、と手のひらを返したように、われわれに甘い言葉をなげかけてきます。いまさら趣味を持つと言われても、我々のような仕事人間にいったい何ができるのでしょうか…。そう思われる仁仁（じん）も、多いのではないのでしょうか？ まして、定年後、時間を持たず日々を送っていた私には、それは自分が社会から必要とされなくなった証のように感じられ、「ああ、私の人生はここまでか」と、寂寥感を覚えずにはいられなかったのです。そんなときに、私が出会ったのが、このインカ文明、そして考古学という学問でした。さて。（二）ここまで。以下は使いませんが参考まで）

（最初は、ただ難解だけで、全く興味など持てませんでした。しかしこれは、決して机上の学問ではないのです。考古学とは、文字記録の残っていない歴史を復元する、おおよそ唯一の方法論です。インカは高度な文明を持ちながら、文字というものを持たなかったため、今まで多くの謎に包まれてきました。ところが、現地で、考古学者たちが、小さな土器や人骨のかけらを掘り起こし、移植コテで傷つけないよう丁寧に地層を剥いでいくと、思いもよらない歴史的事実が判明していくのです。

例えば、インカでは紀元前3500〜3400年に生きていた若い男性の頭蓋骨からは、外科手術の痕跡が見つかっています。当時、インカの医者とは簡単な道具を手に取り、生きた人間の頭蓋骨に穴を開けた。そして砕けていた頭蓋骨のかけらをほとんどきれいに取り除いたのです。現代のような麻酔や滅菌技術を用いないこの手術で、なんと、患者は回復した。これは、アメリカ、テュレーン大学の形質人類学者ジョン・ベラーノ氏の徹底した調査によって明らかになりました。これがわかったときのベラーノ氏や仲間たちの高揚感はどうだったでしょう。まさに歴史を切り開いたような心躍る感覚を味わったのに違いありません。

さて、この講座では、このような様々な歴史の謎を、わかりやすく皆様に、お話ししていこうと

思います。まず今回は、なぜインカには文字がなかったのか、文字がなかったのに、素晴らしい高度な文明を築くことができたのはなぜか。文字の代わりとして使われたキープという、非常に洗練された伝達手段について語っていきます。では…)

ゆっくりと暗転していく。ナレーションが入る。

晴美

お父さんの、インカ講座は大きな話題となり、ネットだけでなく、テレビなどでも取り上げられ、お父さんは一時期、時の人となっていました。問題が発覚した当初は、あわや解散かと思われたインカのグループでしたが、講座が好意的に受け入れられたおかげで潮目が変わり、次第に活気を取り戻していきました。それから半年たって、インカブームが少し落ち着いていた頃、やっとお父さんがペルーに渡航する日が決まりました。

第十三場 結成家 10/31 19時

晴美のナレーション後、シャンソンの調べ。そして舞台上にマイクを持った奈津江が浮かび上がる。情熱的に歌う奈津江。「群衆」歌の途中から、舞台全体が明るくなる。やんやの喝采。

結成家の居間。耕平がいよいよペルーに行くことになり、その歓送会が開かれている。テーブルの上には、美味しそうな料理が並んでいる。耕平、晴美、美香、琴音、茂、健斗、誠子、琢磨。そして、奈津江。

琢磨

いや、かっこいいっすね！

琴音

お祖母ちゃん、すごい！

奈津江

ありがとう。

美香

これ、なんて曲？

奈津江

シャンソンで群衆っていう曲。でもね元々は南米の歌だったのよ。ペルー風ワルツっていわれているの。今日の日に相応しいと思って。

茂

いいわね、感動しちゃった。

誠子

ほんとにねえ。まあ奈津江さん、すっかりあか抜けて…。主婦の頃とは別人みたいじゃないの。よっぽど結成家の水が合わなかったのかしらね。

奈津江

いえ…まあ…

琢磨

誠子さん、今日は、そういうきつい話は抜き。

誠子

あら、あなただれだったかしら？

琢磨

いいからいいから…。まあまあ飲んで。どうぞ(ワインをついだり)

健斗

そうですよ！せっかくの歓送会なんだし。

誠子

あら…、まあそうですね。耕平、あんたいつ発つのか？

耕平

来週の月曜日。

誠子

あと一週間と一日じゃないの！…いまさら言っても仕方がないけど…体には気を付けるのよ。あんた、お腹が弱いんだから…。

耕平

わかってる。

茂

それにしても、思ったよりトントン拍子に話が決まったわね。

晴美

あのあとすぐ、庄司さんたちが記者会見を開いて、今までの謝罪と賠償をきちんとすることを発表して…、それでちよつと落ち着いたのよね。

健斗

たしかに。あのくらいしつかりやると、空気変わるよな。

琢磨

僕も見ましたよ。あの、ゆかりちゃんの涙…レポーターも、一瞬感極まって、言葉が出なかったっすよね。

晴美 まあね…。

誠子 だけど、あれだって、あんた(耕平)がやれっていつて実現したことでしょ。あんたのおかげじゃないの、ねえ。

耕平 姉さん、そういうわけじゃ…

茂 そうよ、耕ちゃんの手柄じゃない。

美香 それから、半年後に、例のあのインカ講座のネット配信が始まったのよね。ねえ、琴音、あれ面白かったよね。

琴音 うん。

琢磨 いやいや。お父さんのパフォーマンスよかった。さすが校長先生だよ。

晴美 あれは、井上君の撮り方がよかったんじゃない。

奈津江 それにあの衣装、すごいインパクトだったわね。

健斗 あの、衣装替えを提案したのは、実は…

晴美 え、だれだっけ？

健斗 いや、俺。

晴美 え？そうだった？

健斗 そういうこと忘れるよなくお前。

琢磨 まあまあ…。あのアイデアで、動画の注目度もぐんとあがったし…まあ、あれは君の手柄つてことにおこうよ、な、健斗。

健斗 よびすてかい。

晴美 もう、それはいいから。要するに、講座が始まってから、すっかり風向きが変わったってこと。で、献金も続々集まって、参加費が少なくても行けるようになって…

茂 それでいきなり参加者が増えたのね。

美香 まさか、たった一年で行けるようになるなんて…

耕平 たった、じゃない。長い一年だ。

茂 耕ちゃん、事務局の一員になって、ずいぶん活躍したわよね。

奈津江 そう、よかったわね。なんだかすごい「おまけ」になってきたわね。

美香 え、なに、おまけって？

奈津江 さあ、なにかしらね(耕平に)

耕平 いや、たいしたことじゃない。

茂 風向きが変わったっていえば、誠子さん、なんでいきなり、ペルー行き賛成に回っちゃったの。あんなに反対してたのに？

誠子 そりゃ、耕平の本当の気持ちを聞いたからよ。

健斗 本当の気持ちって？

誠子 そう、あんたたち(娘二人を指して)が、いつまでたっても家にへばりついて、すねっかじり止めないでしょう。いっそのこと自分が、外国かどこか、手の届かないところに行った方が、あんたたちのためになるって思ったんだって。

奈津江 まあ、そうだったんですか。

耕平 姉さん、その話は…(やめて)

誠子 いいから、あんたたちちゃんと聞きなさい。家族が仲いいのいいことだけど、親にだって定年退職はあるんだよ。ねえ、奈津江さん？

奈津江 え？

誠子 あんたの方が、耕平より一足先に退職したんだから。ま…勝手なものだ。…だけど、耕平にはいい薬になった。そうだよ？

奈津江 …いえ…まあ…(苦笑い)

誠子 親はね、あんたたちより先に死ぬんだよ。耕平なんか、いつポツクリ行くかわかんないんだから…それがちよっと早くなったただけでしょ。だいたい…

耕平 姉さん、もう…(そのくらいでやめて)
琢磨 はいはいはい、もうそのくらいにしときましょねえ、誠子さん。
誠子 だからね、あんたさつきから…何者なの？
琢磨 おれはねく赤の他人ですよ。だからいいんですよねっ
誠子 (笑) あんた面白いわね。

健斗 はい、誠子さんどうぞ。(お菓子かなにかを渡す)
誠子 あら…
琢磨 はいこつちもどうぞ。
誠子 (みんなでごまかしてうるさいったら) うるさいっ。もう結構、トイレよ！ (立ってトイレに向かう)

琢磨 ひゃー、すげえばあさんだな。
しゅ！

健斗 (声をひそめて) あの…いいタイミングなんで、ちよつと言っちゃいますけど…

奈津江 (ひそひそ) なに？

みんな (ひそひそ) え？なにになに？(など)

健斗 (ひそひそ) あの…おれと晴美は結婚します。

みんな え？ええっ！

晴美 ちよつと！健斗！こんな時言う、普通！

美香 いいじゃない！ねえ、それほんとの話なんでしょ？

晴美 うんまあ…

奈津江 よかったじゃないの。おめでとう！

琢磨 晴美ちゃん、いよいよよか！なんかさみしくなあ…

健斗 健斗、誰かさんにとられる前でよかったね(笑) よくやった！

茂 (ここは健斗にお任せ) 動画は、まだこれといって当たってないし、お笑いの方も全くめどは立ってないけど…。ま、さっきの誠子さんじゃないけど、今度のこと、おれしっかりしなきゃな、って思っ…。あの…(耕平に) えーと、お父さん。…いやくにがてだ。

健斗 …あのお父さん。えー

耕平 健斗君、もうわかったから、…いいよ。もう、ありがとう。

琢磨 なんだそりゃ。

晴美 もう！とにかく結婚します！ お父さんが行く前に言おうって、三人で話してたの。

美香 三人？…(気づいて)あ。

琴音 そういうわけなので、よろしくお願いします。

「琴音が一番しっかりしてる」、などなど。みんな和やかな雰囲気、笑い。そこへ、誠子さんが戻ってくる。

誠子 どうしたの？

みんな いやいやなんでもないです(と口を口々に)

誠子 はっきりおっしゃい。

耕平 いたた…

誠子 なによ！

耕平 いや、みぞおちがちよつと。いたたた…

最初は、笑っていたみんなも、耕平が本当に痛がっていると気づき、緊迫した様子に。

晴美 お父さん？

みんな 耕平さん、どうした、どこがいたいって、しっかりして…(など口々に)
奈津江 ねえ、救急車呼んで！
健斗 おれ、電話します。

騒然とした中、曲が入り、暗転していく。

第十四場 結城家

耕平が倒れた翌朝八時、結城家の居間。晴美、美香、健斗、奈津江が戻ってくる。カーテンを開け、部屋の片づけをはじめめる。

奈津江 結局、病院で夜明かししちゃったわね。ごめんね、健斗君まで付き合わせちゃって。

健斗 なにいつてるんすか。当たり前っすよ。

美香 お父さん、ベッドに寝かしてきた。

奈津江 痛みはどう？

晴美 だいぶおさまったみたい。

奈津江 よかったわね。

美香 あー、なんかお腹すいた。

晴美 そうね、朝ごはん作る？

奈津江 いいわよ。だって、晴美も寝てないんだから、疲れたでしょ？

健斗 おれ、朝マックでも買ってこよっか？

美香 いいね、あたしもいっしょにいこっかなあ

その時、ピンポンと呼び鈴の音。こんな朝早くに誰だろう？と、ちよつと顔を見合わせる一同。

晴美 はい。(美香にはら出ると目で合図)
美香 うん。(玄関に行く)

玄関にて、かげ声。

美香 はい、どなたですが？(ドア外に向かって)

薫 (外で)菊池と申します。

美香 え？あ、はい(ドア開けて)あの…薫さん？

薫 はい…すみません。

美香 あ…とりあえず、どうぞ。

薫 失礼します

薫、後に続いて、美香が入ってくる。

薫 すみません、こんな朝早くに…。あの、耕平さんは？ 今病院ですか？
晴美 え？

薫 あんなことしておいて…今更、本当に申し訳ありません。お願いします。最後に一目お会いしたいんです。どうか、お見舞いに行かせてください！

晴美 ちよつと、どうしたの？薫さん、落ち着いて…。父はもう家に帰ってるのよ。

薫 え…そんな…間に合わなかったんですね…(泣き崩れる)

一同あっけにとられ、顔を見合わせる。奈津江が進み出て、薫を抱き起し…

奈津江 健斗君、ちょっと手伝って。

健斗 はい（二人でソファに座らせる）大丈夫ですか？

奈津江 美香、ティッシュとって。

美香 うん。（ティッシュの箱を取りに行く）

奈津江 晴美、タオル濡らしてきて。

晴美 うん（タオルを濡らしに行く）

奈津江 あなた、菊池薫さんよね？

薫 え？…はい…

奈津江 私ね、耕平の家内…じゃなくて、元の奥さんね。晴美たちの母親です。耕平は無事よ。ゆ

うべ食事中に急にみぞおちが痛くなって、病院に行ったんだけど、もう大丈夫。痛みが落ち着いたんで、うちに帰ってきたの。

…ほんとですか？…ああよかった…

薫 （タオルを持って戻ってくる）お母さん（母にタオルを渡す。健斗に目はどう？）

健斗 うん、少し落ち着いた。（晴美に）

晴美 そう。（良かったという顔）薫さん、何があったの？もしかして、お父さんのことで、だ

れかから連絡があった？

薫 実は昨日、夜遅く、ゆかり…さんから電話があつて。

え、小島ゆかり？

はい…

舞台つらの一角、スポットにゆかりの姿が浮かび上がる。ゆかりが電話をかけている。

ゆかり （呼び出し音はなっているがなかなか出ない。しばし待ってようやく相手が出る。一呼吸

おいて）あ、薫さん？私。あのさあ、文化庁の登録更新、どうすんの？

薫が別のスポットに浮かび上がる。

薫 え？

ゆかり ネットで用紙、ダウンロードしようと思ったんだけど、種類が多くて、どれだかわかんないの。なんてやつだっけ？

薫 …なんで私に？

ゆかり だって薫さんしかわかんないんだもん。それから、この申請につける「別紙一」って、どうやって書くの？ 昨年度の会計報告は、ファイルのどこに保存してあんの？

そんなこと、今更私に聞かなくなっちゃって、信彦さんがわかるんじゃないんですか。

ううん、全然わかんない。ね、今すぐきて、説明してよ。

今すぐたって、終電もうないです。

なんでもいいから来て。

薫 ゆかりさん、十月月ぶりに電話してきて、いきなりそんなこと言われたって…。あなた、

私のことなんだと思ってるの。私はもうやめたんです。もうあなたたちに、振り回されるなんて、まっぴらです。もう私にかかわらないで！

…

もう切ります。

薫 ゆかり…じゃあ、明日来て。

薫 …ゆかりさん。

ゆかり 薫さんがいないと困るんだ、あたし。

薫 ……あんなことしたのにな？

ゆかり 朝一で来て。

薫 ネットで、炎上するようなコメントをいっぱい書いたの、…私なんですよ！

ゆかり ……あたしは、あんたが必要なの。

薫 (間)……

ゆかり 朝一で。

薫 ……無理です(小声で)

ゆかり それからさ、明日事務所に来る前に、寄ってきてほしいところがあるの。…実は…耕平さんがさ…(いきなりぼろぼろ涙をこぼしながら) さっき家で倒れたって…うん、心臓かもしれないって…もう意識がなくて、このままだめかもしれない…最後に、どうしても薫さんに会いたいって…(ここから、少しサイレントのゆかりのセリフが続く。やがて電話を切って、いたずらっぽく微笑む)

このセリフの途中でさきに薫のスポットが消える。一步遅れて、ゆかりのスポットが消える。そして、部屋の照明に戻る。

健斗 え〜てことは、つまり

晴美 小島ゆかりに騙されたってこと？

薫 はい、まあ…。

晴美 やだもう！私、お父さん大丈夫だけど一応(知らせておきます)って、チャカーナに連絡したのにな。

薫 そうなんですか。…私、昨夜聞いたときは、もう目の前が真っ暗になってしまつて。ゆかりさん、まだ、病院の名前は聞いていないっていうんで、すぐにこちらに思つたんですけど、私、どうしても勇気が出なくて…。朝になって、やっと、家を飛び出してきたんです。

奈津江 そうだったのね。

薫 だから、もしその前に耕平さんがつて思つたら、もう…

美香 薫さん

薫 私、耕平さんには、本当にお世話になりました。あの事件があつて、私がチャカーナを辞めた後も、何度もご連絡をくださつてたんです。…父に借りたお金の件も、弁護士さんと一緒に父に掛け合つてくれて…そのおかげで、父も納得してくれました。

健斗 耕平さんらしいな…

美香 だね。

晴美 お父さん、そんなこと一言も言ってくれないんだから。

薫 ……私、あんなひどいことしたんだから、もうチャカーナには戻れない、って思つてました。飯に戻れたつて、あんな苦しい思いをするのもうたくさんだつて…。

美香 うん。

薫 ……つて思つてたんですけど、あの人たち、私がいないとほんとダメなんですよ。事務処理も経理も、全くできないんです。実は辞めた後も、他のメンバーから、あれはどこにいったんだ、これはどうやったらいんだ、って、しょっちゅう相談の電話が来てて。私だつて、もし薫さんがいたら…ずっと思つてた。

晴美 ありがとうございます。昨夜ゆかりさんの声を聞いたら、もう私、放っておけなくなつちやつて。…私、この後事務所に行ってきます。やつと決心がつかました。まったくもう、私ってばかですよね。…でも、誰かに必要とされるつて、悪い気はしないですね。

奈津江 そうよね。

薫 インカが好きかって言われると、今はまだよくわかりませんが、とりあえず。しばらくは、私もできることを、チャカーナでやってみようと思います。

晴美 薫さん、優しいんだから。でももう無理はしないでね。

薫 はい、ありがとうございます。

美香 えへ…実はね…わたしやっつたりしたいこと見つかった。

晴美 え？ほんと

美香 今度のことでのいろいろ考えちゃって…、バイト卒業してこんどこそ就職する。

健斗 なにやるんだよ？

美香 最近時々、お母さんの働いてる施設で、高齢者向けダンスクラスの指導員をやらせてもらってるの。やっつると新しいアイデアがいっぱいわいてきて、意外と面白いのよ。…これ私しかできないかも、って思っちゃった。そしたら、専属でって頼まれて。

薫 それ素敵ですね！

美香 うん、私もお父さんのやる気に煽られちゃったのかもね。

晴美 そうね…。あの…ねえ、薫さん。実はお父さん、ペルー行き、無理だと思うの。明日、内視鏡をやっつて、その結果次第だけど…。お医者さんの話では、胃がんの疑いが濃厚ですつて。

薫 え！ そんな…

晴美 ごめんなさい、ご迷惑かけて…。

薫 そんなことより…耕平さん、あんなに楽しみにしてたのに。

晴美 残念だけど、移住は中止ってことに…

耕平が入ってきている。

耕平 いや、大丈夫だろう。検査は明日終わるんだ。渡航には十分間に合うじゃないか。

美香 なにいつてんの、ダメだって。検査の結果、ガンが見つかったらどうするの。

耕平 うくん…しかしな、ここまできて、行けないっていうのはなあ…

美香 お父さん。(だめよ)

耕平 せめて、結果が出るまで保留にするっていうのは？

晴美 だめ。

健斗 俺はいいと思うけどな。

耕平 なあ。

晴美 だーめ。それじゃ、よけいご迷惑でしょ？ ね？(薫に)

薫 耕平さん。

耕平 薫君！

薫 まずは、ご自分のお体を大切にしてください。

耕平 いいや、どうせ、いつまでも生きられるわけじゃないんだから、最後に好きなところに行かせてくれ。それで死んだら死んだで本望だ。

晴美 お父さん。何ばかなこと言ってるの。まだ死なないわよ。

奈津江 そうよ、ちゃんと治療して、直してからだつて遅くないでしょ。

耕平 いや…すぐにいく。今行きたい…

晴美 お父さんつて、けっこうせつちだったのね。

奈津江 今頃気がついた？

耕平 うるさい。…人のやりたいことに口を出すな。

晴美 お父さん！

美香 いいかげんにして！

耕平 くそ、ここまできて行けないとは…せめて一週間だけ…

晴・美・奈　だめったらだめ！

ラストの曲がにぎやかに入る。まだ耕平と家族たちはもめている。
温かい人々の愛情にあふれた情景の中、終演となる。

完

※劇中のBGMは、主にシャンソン、またはシャンソンのアレンジ曲を使用。